

ランチョンセミナー

丸山昌朗先生の 『経絡の研究』の紹介

編集部部長 金古 英毅



丸山昌朗先生の紹介



略歴

- ❖ 大正6年(1917)2月12日生まれ
- ❖ 昭和9年(1934)17歳。中学4年、病気で欠席がちのため退学勸奨。東大病院にて「結核性痔瘻」と診断。灸の名人・沢田健の1年間の治療で完治
- ❖ 昭和16年(1941)24歳。昭和医学専門学校卒後、沢田健の高弟・城一格に入門
- ❖ 昭和20年(1945)28歳。鎌倉市の自宅で医院を開設、鍼灸専門を標榜
- ❖ 昭和24年(1949)32歳。「日本東洋医学会」創立委員

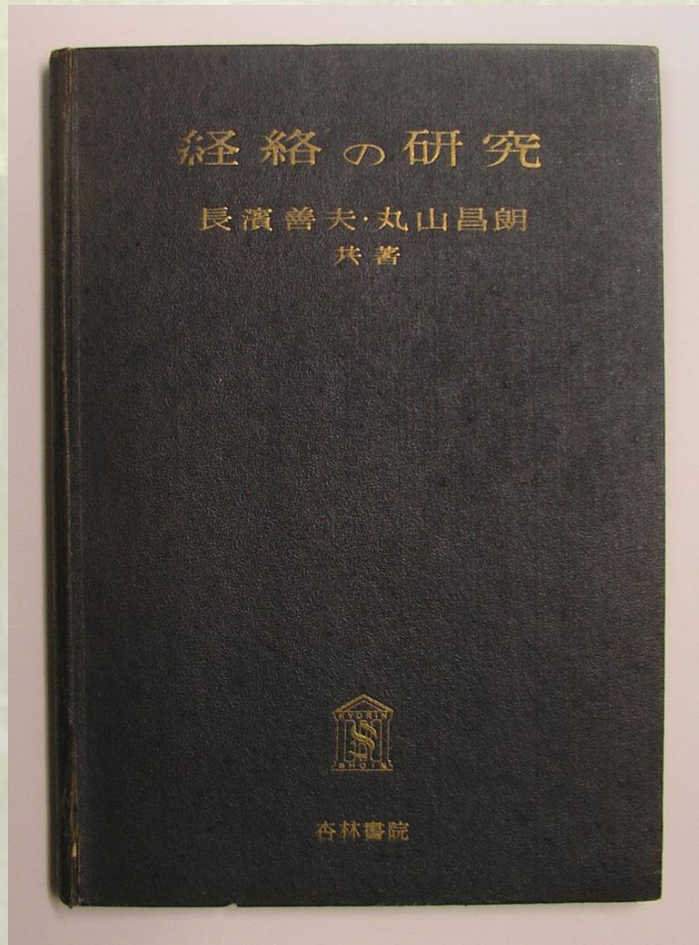
略歴

- ❖ 昭和33年(1958)41歳。東京都新宿区若葉町に移転、医院を開設
- ❖ 昭和34年(1959)42歳。東洋鍼灸専門学校・2代目校長
- ❖ 医道の日本社主催の「経絡治療夏期講習会」(後に「夏期大学」と改称)講師として参加、以後16回まで担当
- ❖ 昭和40年(1965)48歳。日本民族医学研究所の設立に参加、同所主催の「東洋医学講習会」の講師を長沢元夫・石野信安・小野文恵氏らと担当

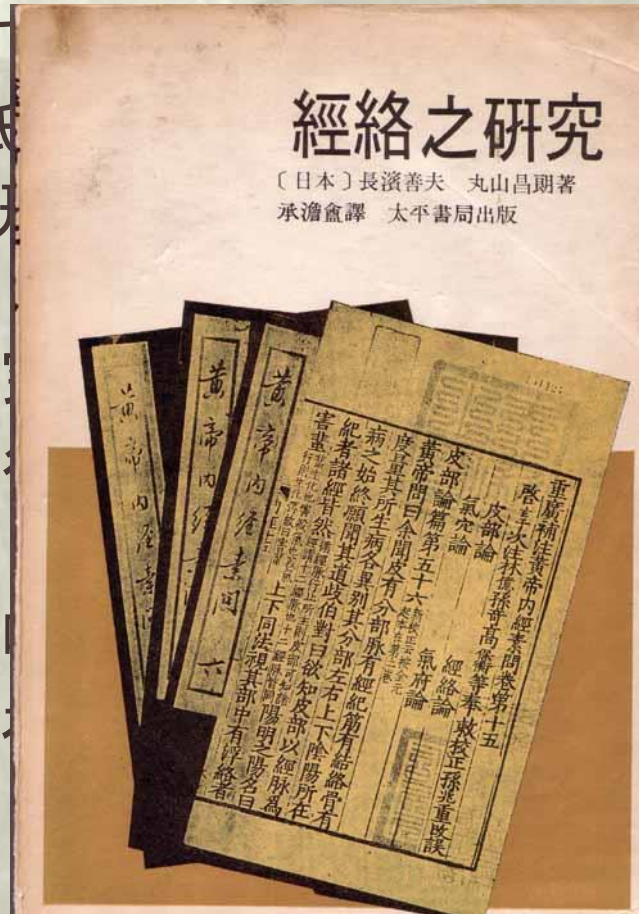
業績



経絡研究



穴に関
「善夫氏
象」を研
絡の研
絡の走
絡学提
絡の実



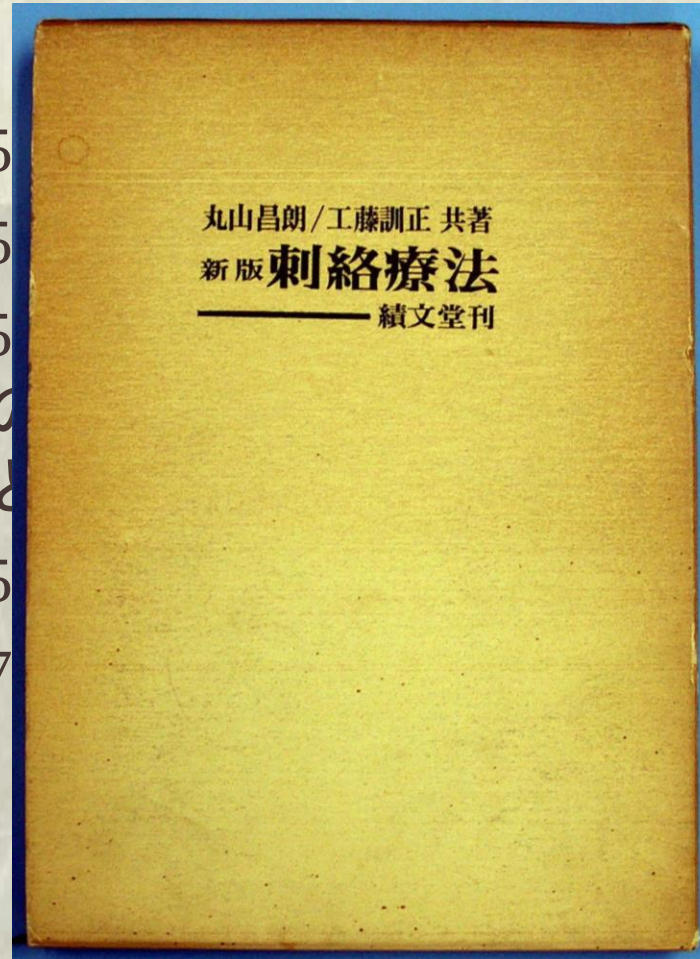
誌』)
「経絡
の発
洋医
を治療

経絡研究

- ❖ 昭和40年(1965)「新経絡 仮称・督兪経について」(『日本東洋医学会誌』)
- ❖ 昭和49年(1974)「経絡治療法の歴史的展望」(『経絡治療』)
- ❖ 昭和50年(1975)「経絡発見の端緒に就いて」(『経絡治療』) 絶筆

刺絡研究

- ❖ 昭和29年(1954)
- ❖ 昭和30年(1955)
- ❖ 昭和31年(1956)
「刺絡血液の」
「刺絡の歴史と」
- ❖ 昭和32年(1957)
- ❖ 昭和51年(1976)



床』)

洋医学会誌』)

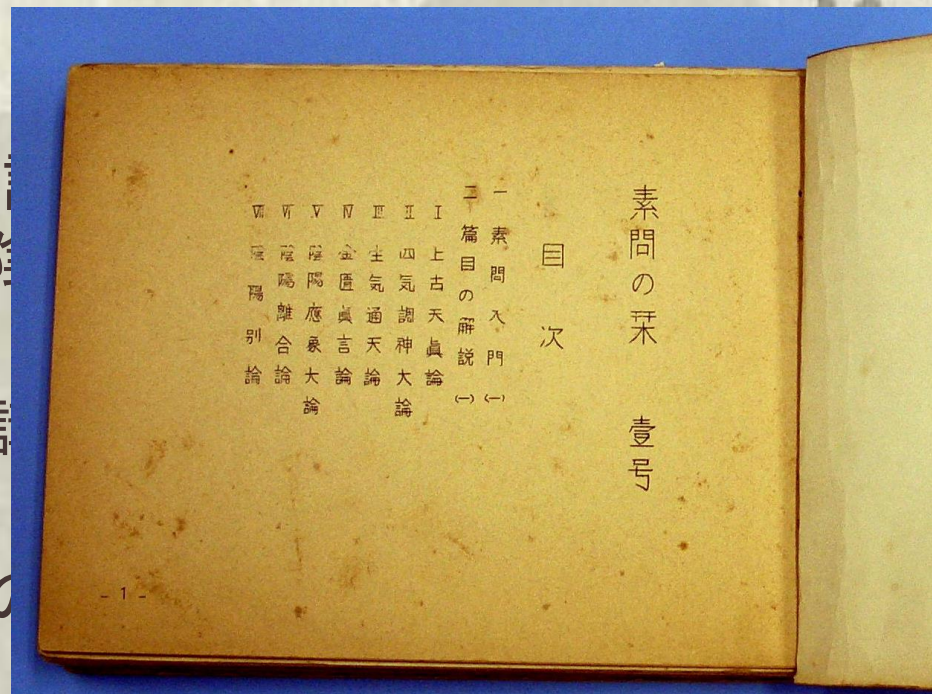
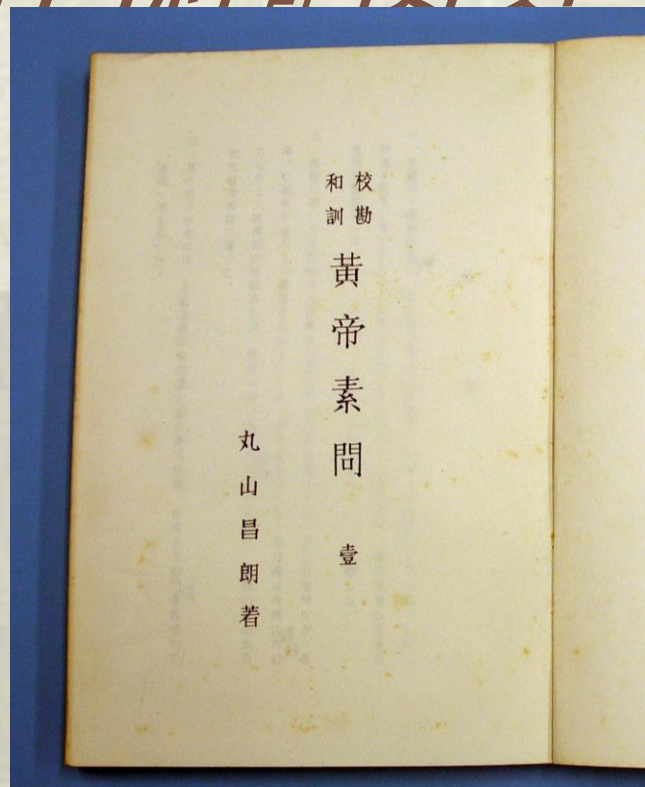
誌』)

『漢方の臨床』)

日本社刊)

堂刊)

『内経』関連研究



- ❖ 昭和38年(1963)『校勘和訓・黄帝素問』全10巻
『素問の栞』発行



研究

素問講義



- ❖ 昭和40年(1965)「『素問』」
- ❖ 昭和43年(1968)「『素問』」
- ❖ 昭和49年(1974)「『素問』」



『日本東洋医学会誌』
 全12巻発行
 第58回にて終講
 義
 『素問』を読む会主催)
 『日本東洋医学会誌』
 『訓注銅人腧穴鍼灸図經』(續文堂刊)

基礎概念の研究

- ❖ 昭和35年(1960)「科学と陰陽五行説」(『漢方の臨床』)
- ❖ 昭和41年(1966)「三陰三陽論」(『経絡治療』)
- ❖ 昭和44年(1969)「気」に就いて」(『経絡治療』)
- ❖ 昭和45年(1970)「補寫について」(日本鍼灸治療学会)
- ❖ 昭和47年(1972)「鍼灸における「学」と「術」について」
(『医学評論』)

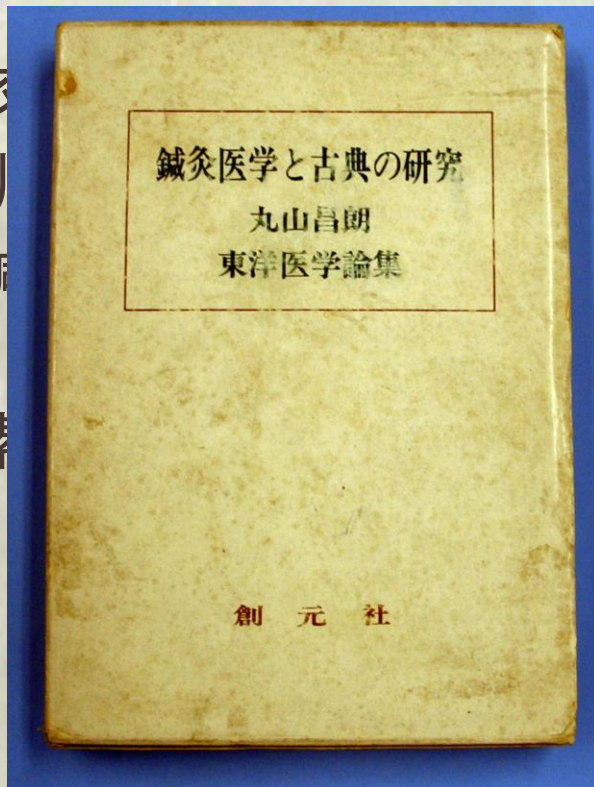
その他、脈診の研究、古典の論考、古典の訓釈など
論文多数

著 書

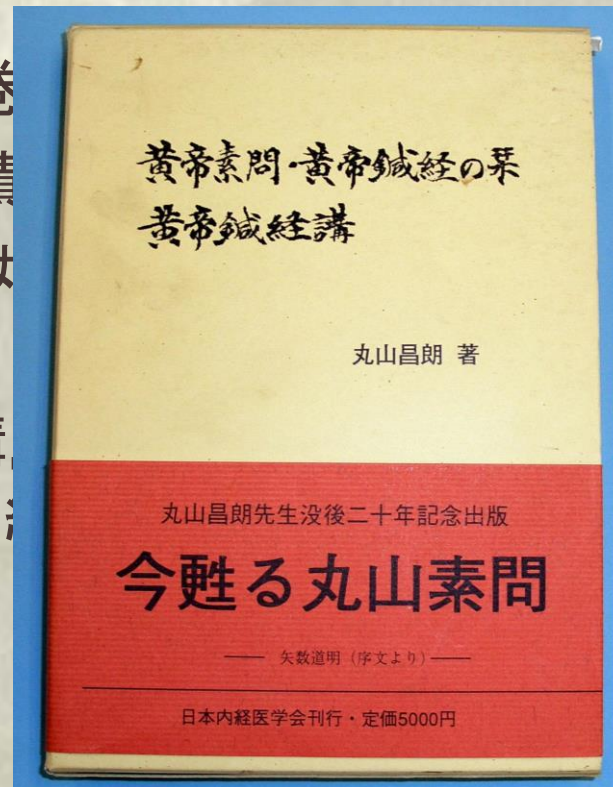
- ❖ 『経絡の研究』
(長濱善夫と共著、杏林書院刊、昭和25年5月)
- ❖ 『刺絡治療法』
(工藤訓正と共著、昭和32年11月、医道の日本社刊。
『新版刺絡療法』として昭和51年、績文堂刊)
- ❖ 『校勘和訓・黄帝素問』全10巻(昭和38年8月刊)
- ❖ 『素問の栞』(昭和38年8月刊)
- ❖ 『太素経欠巻復刻和訓解説』
(石原明・田口友康と共著、昭和39年8月刊)

著書

- ❖ 『杉本素問』
- ❖ 『訓詁考』
- ❖ 『鍼灸経講』
- ❖ 『素問』



12巻
『(績
』一丈
経講
本内;



(
—
4月)
3月)

『経絡の研究』の紹介

昭和24年(1949)4月、千葉医大眼科教室に入院中の鍼響に敏感な1患者について長濱善夫氏と共同研究。「経絡に対する鍼の響き現象」を追究した結果、その鍼響現象は『靈枢』経脈編の経脈流注にほぼ一致することを確認。その成果を『経絡の研究』(長濱・丸山共著)としてまとめ、翌年5月に杏林書院から出版。

I. 実験例

1. 昭和24年3月
2. 被験者：白○萬○郎、男、51歳、履物商
3. 診断症病名：単性視神経萎縮

I. 実験例

4. 既往病歴並に現病歴

- ・7歳：落雷に感電、以後雷鳴・電光等を嫌悪する傾向が強い。
- ・24歳：性病（淋疾）に罹患。35歳の頃再度罹患、当時ワッセルマン氏反応は陽性、駆梅療法は施行したが中断
- ・51歳：昭和23年7月、顔面皮下を虫の走るような搔痒感と共に視力障害が起こり、医治を受けていたが漸次視力は低下。

初診時中心視力は[右：0 左：明暗]。鍼療により中心視力は[右指数：50cm 左：0.04]まで良転し、鍼療に際しては鍼響を極めて過敏に感知。また鍼刺中は鍼響は間断なく現れていた。

I. 実験例

5. 体格(実験時)

やや肥満型、栄養状態中等、身長158cm、胸囲88.2cm、座高86.5cm、体重62kg

6. 備考

本実験例が何故鍼響に敏感であるかの体質的な解釈は不明である。著者の経験によれば、視神経萎縮の患者、或いは梅毒血清反応陽性者は必ずしもそうではない。寧ろ幼少時落雷に感電したことに一つの体質的素因があるのではないかと考えられる。

Ⅱ. 実験方法

1. 刺鍼法

鍼は銀寸3・3番、金属製鍼管使用

2. 刺鍼部位

各部位(原穴。奇経は原穴に準じる部分)に1～3mmの深さで置鍼

経穴部位決定は古医書に基づく大体の位置を決め、指頭でその部の陷凹・圧痛などを調べる。さらに鍼尖を皮膚に接着して最も鋭敏に感ずる処を刺鍼点にした

II. 実験方法

3. 体 位

各実験毎に坐位、立位、仰臥位などのうち最も顕著で広範に鍼響を現す姿勢を適宜とらせた。
手足は置鍼中でも適宜に上下移動

4. 鍼響の記録

鍼による異常感覚部を皮膚上にたどり最も強く現れている部分を墨汁による実線、比較的弱い部分は点状、特に強い孤立点は●で示した

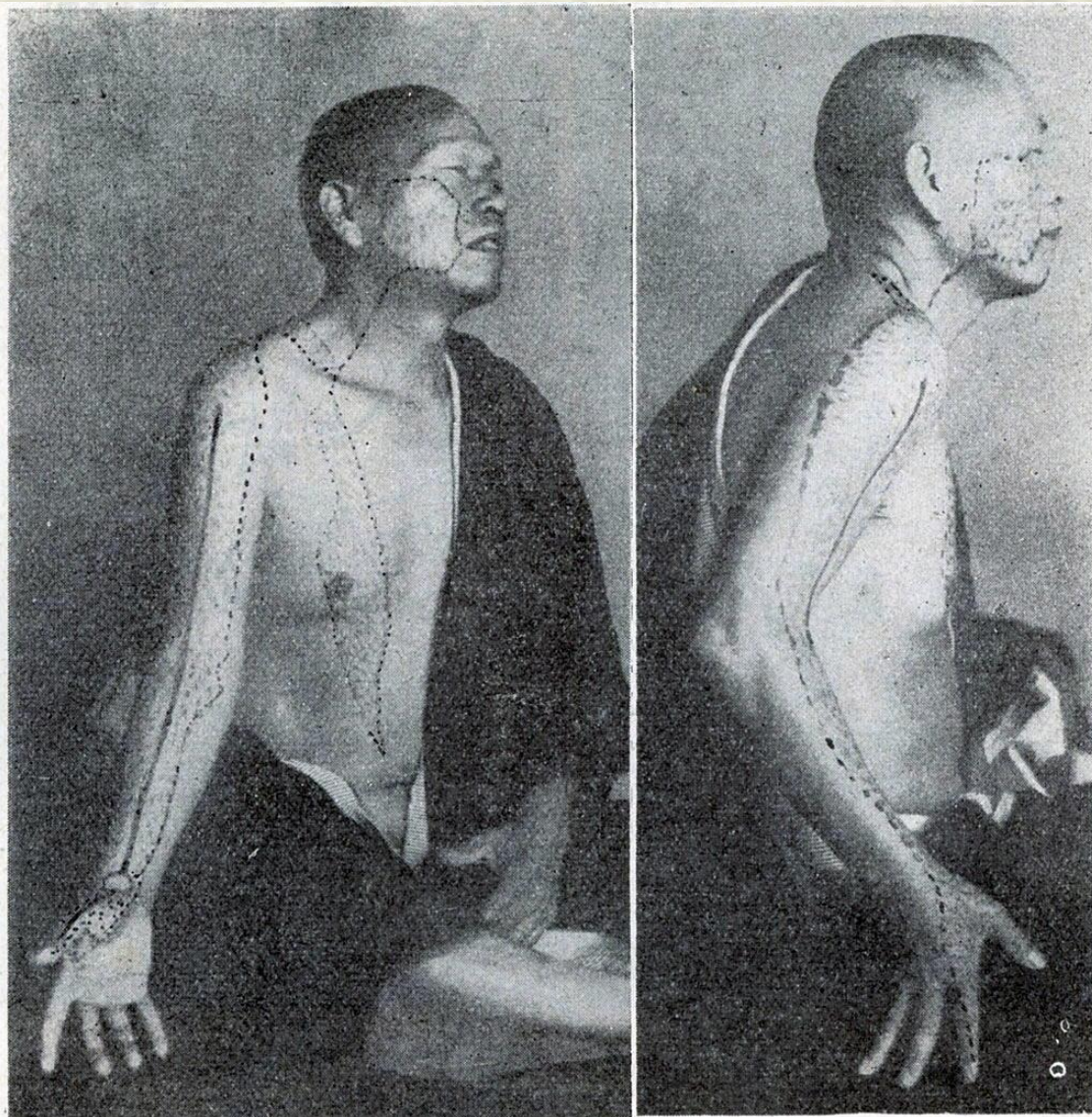
III. 鍼の響き

1. 放散性の異常感覚
2. 刺鍼に際し主として皮下組織中に生ずる
3. 痛覚や圧覚とは区別すべきも麻れ感覚乃至電気刺激感覚に近い
4. 麻れ様微痛を伴うこの感覚の放散方向は、『内経』その他の古医書記載の経絡走行に極めて類似している

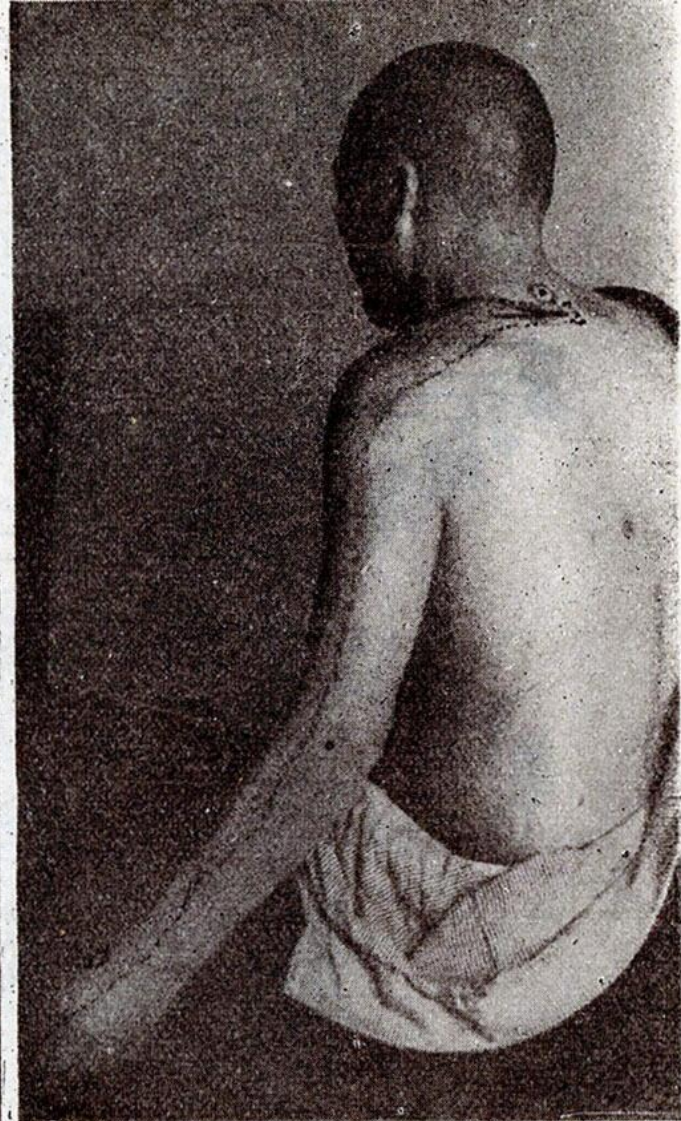
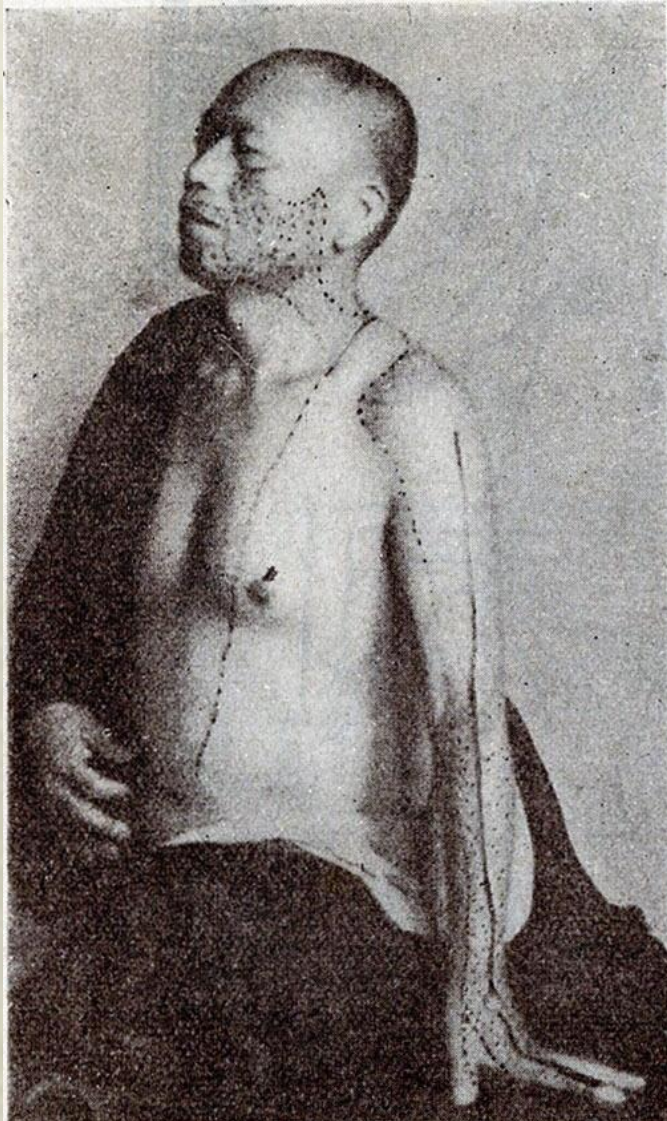
IV. 十四経と奇経の鍼響現象



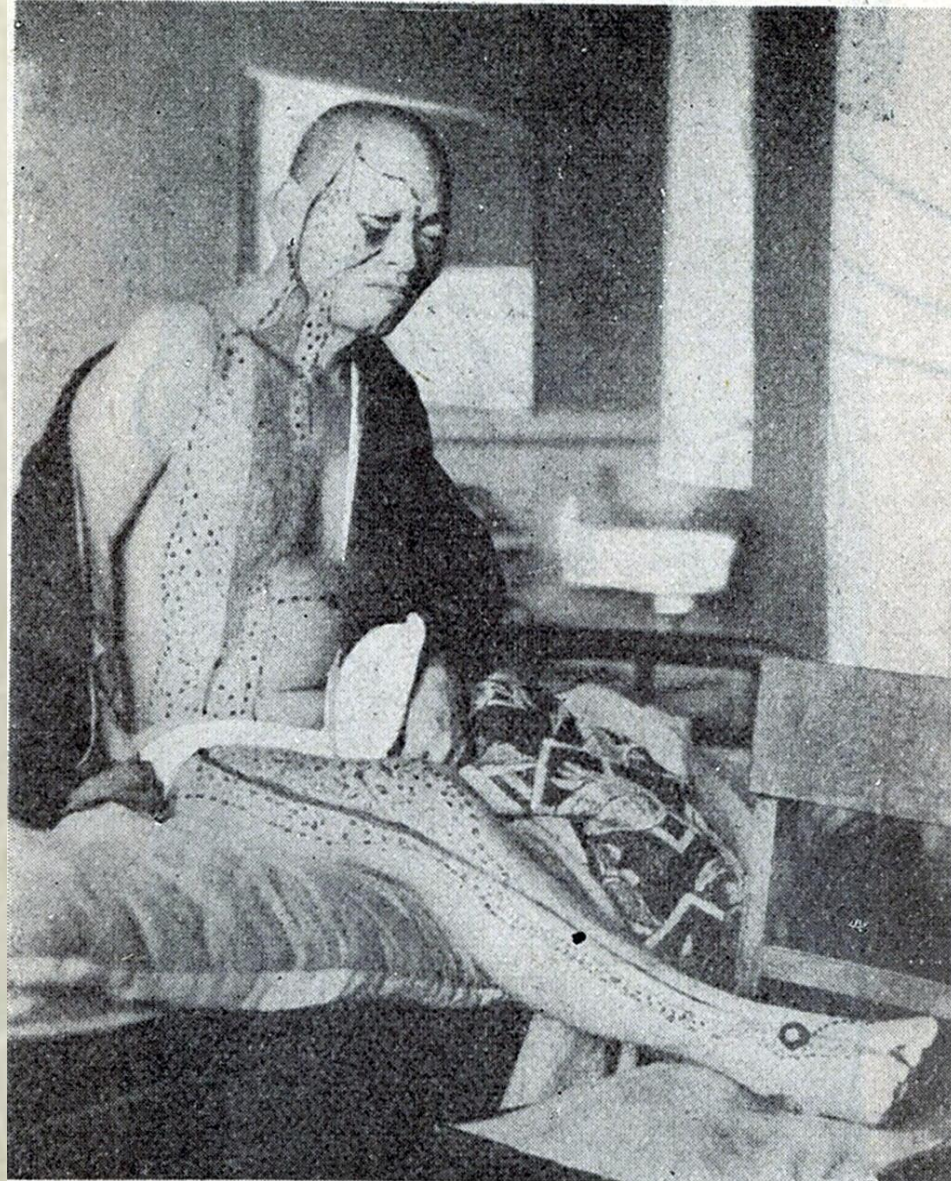
1.手・太陰経とその支



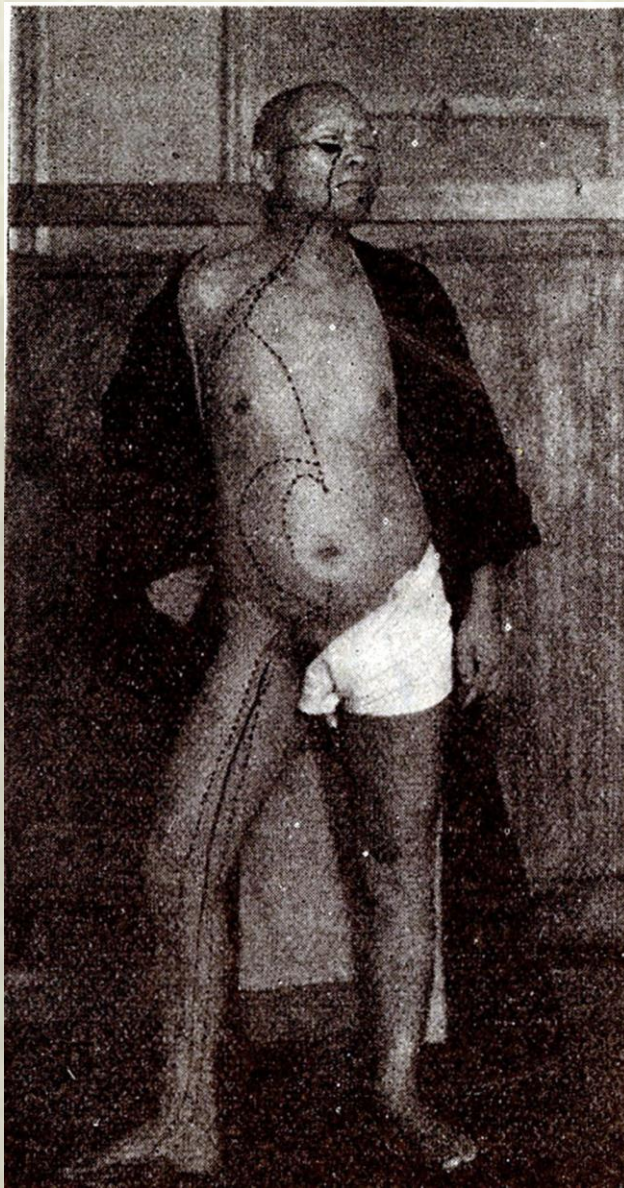
2.手・陽明経とその支



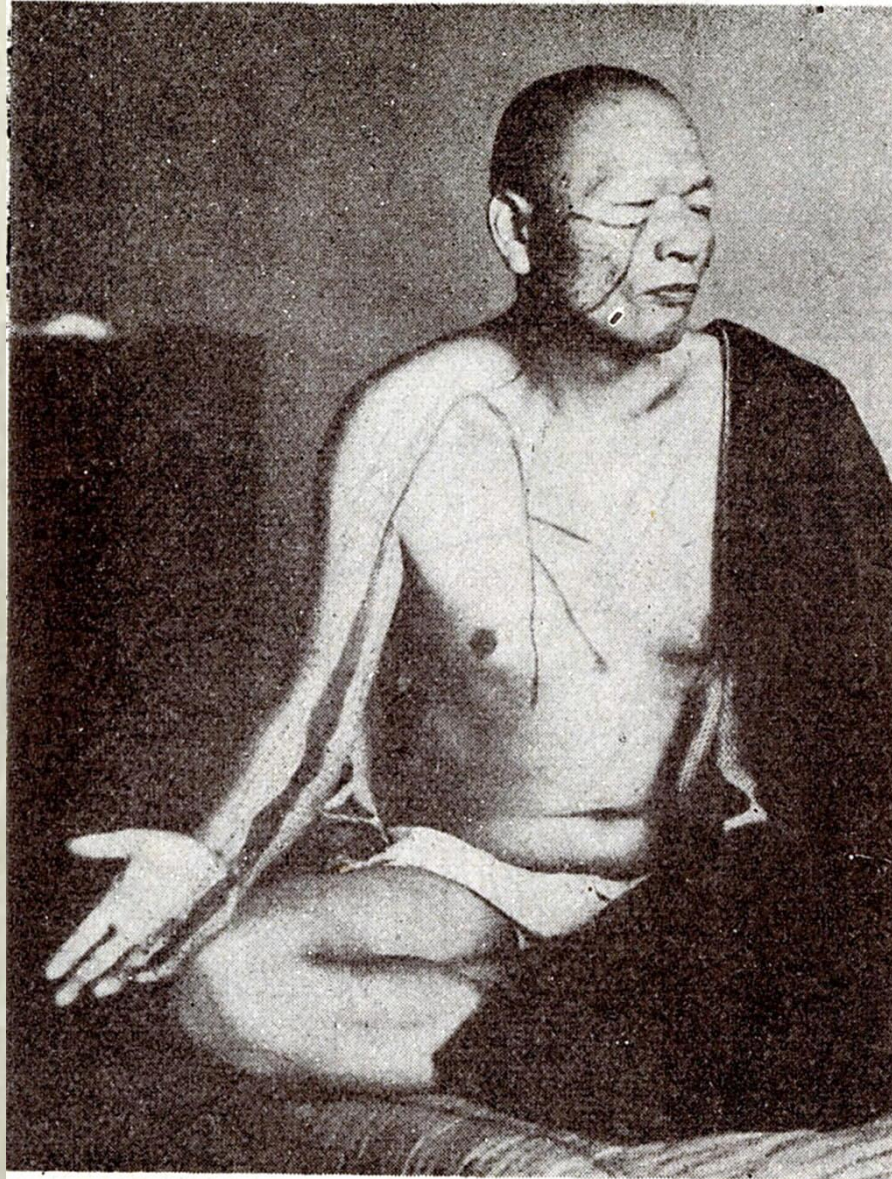
3. 足・陽明経とその支



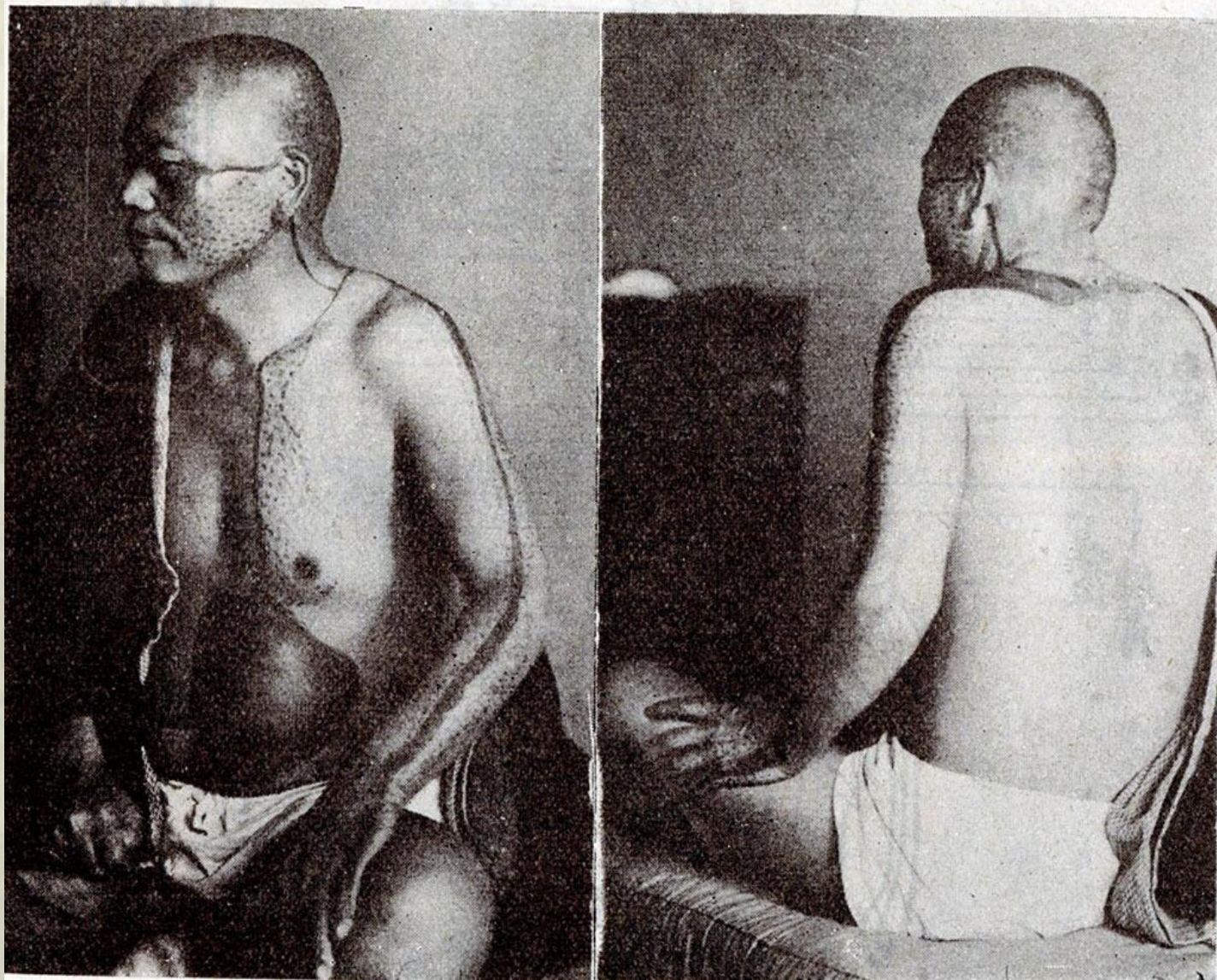
4.足・太陰經



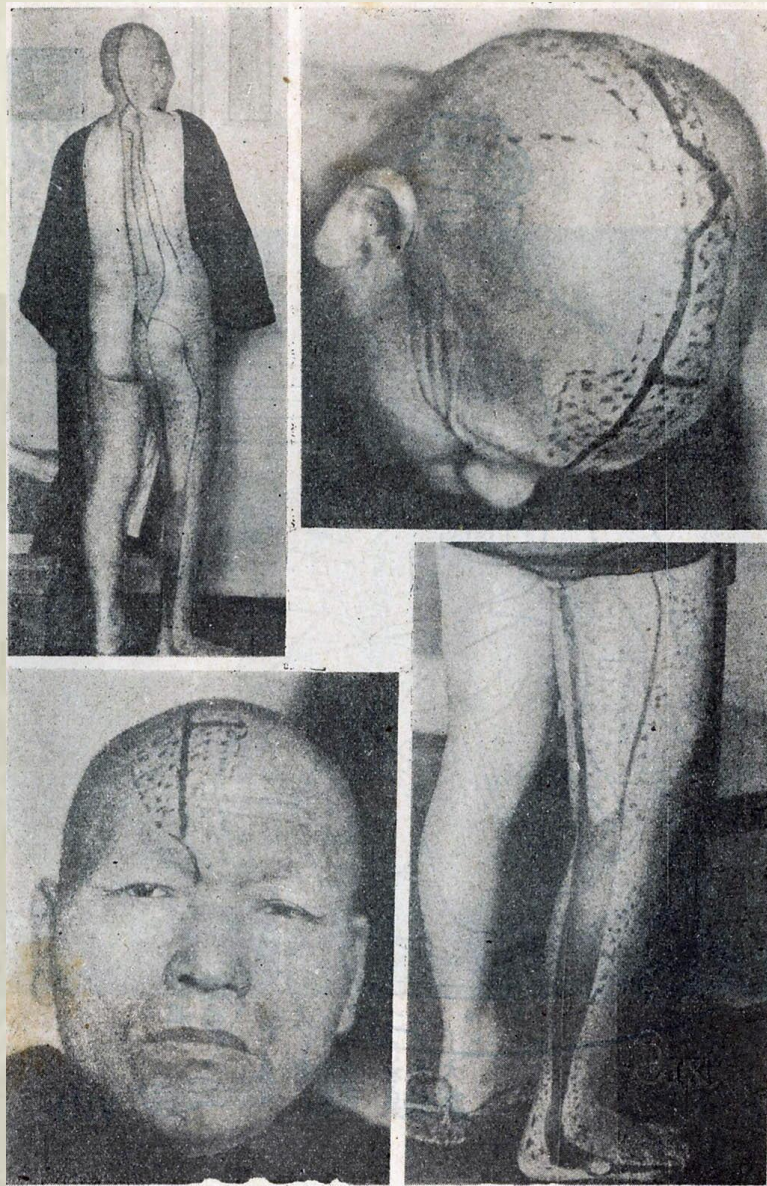
5.手・少陰経とその支



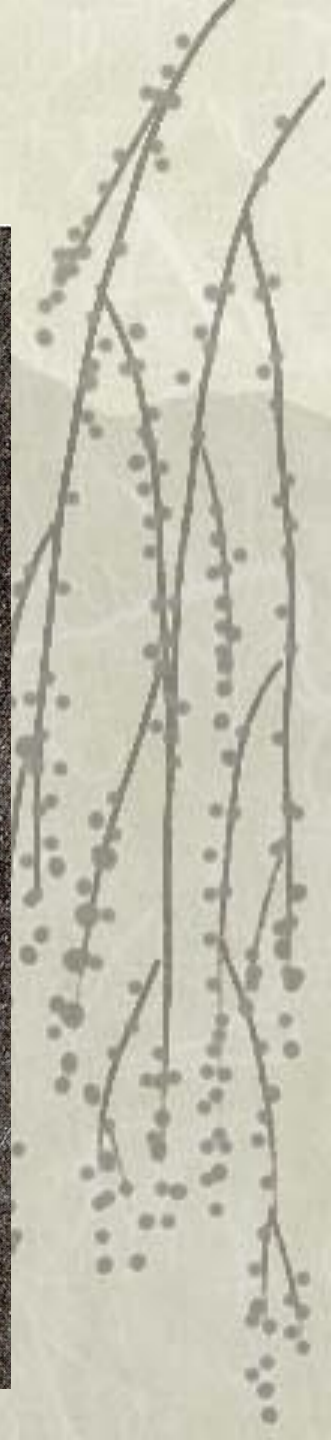
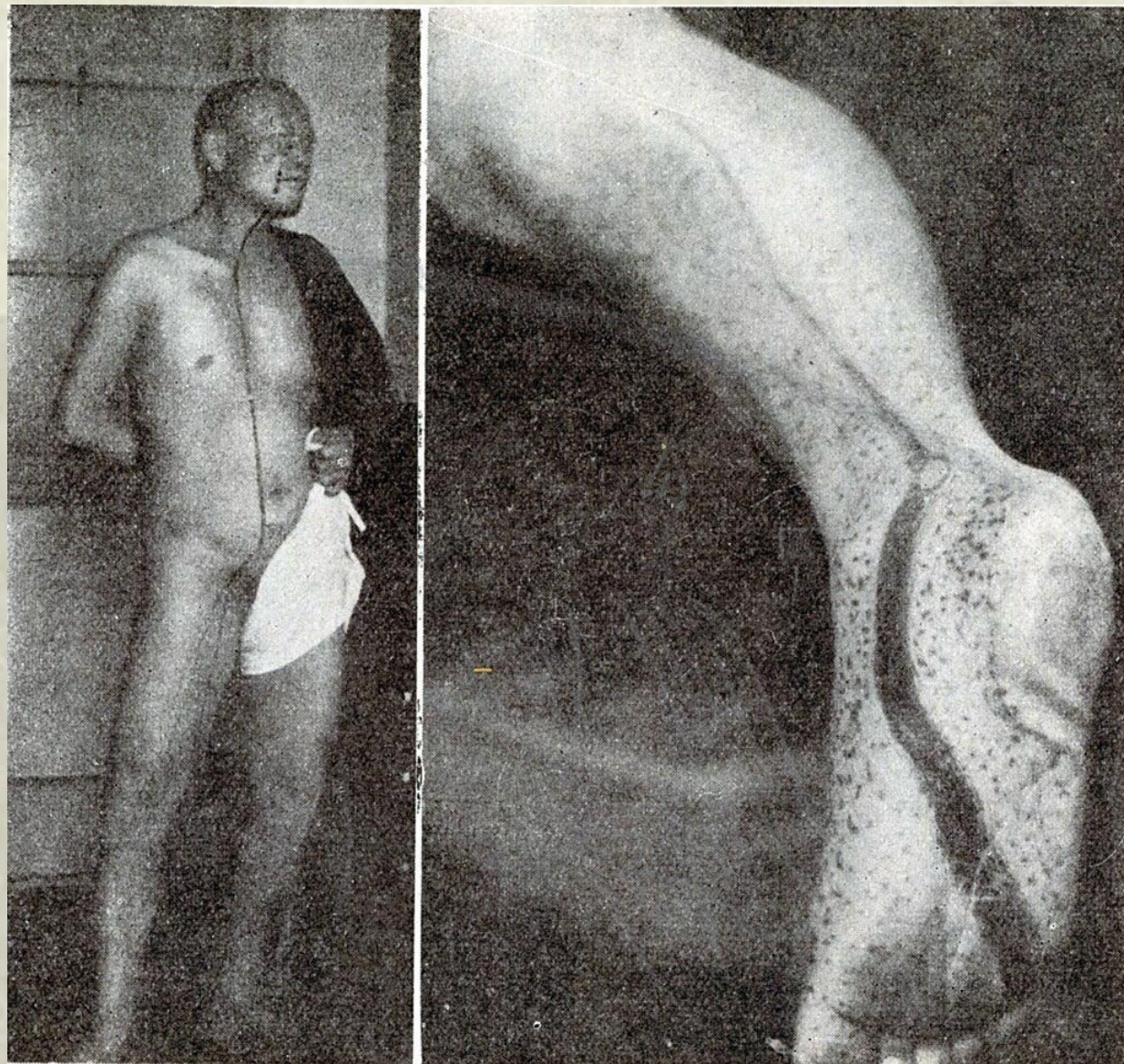
6.手・太陽経とその支



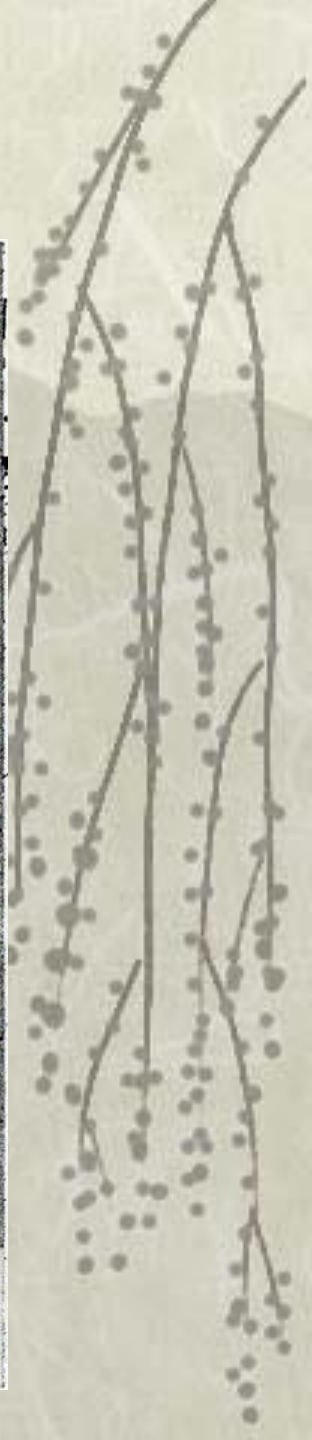
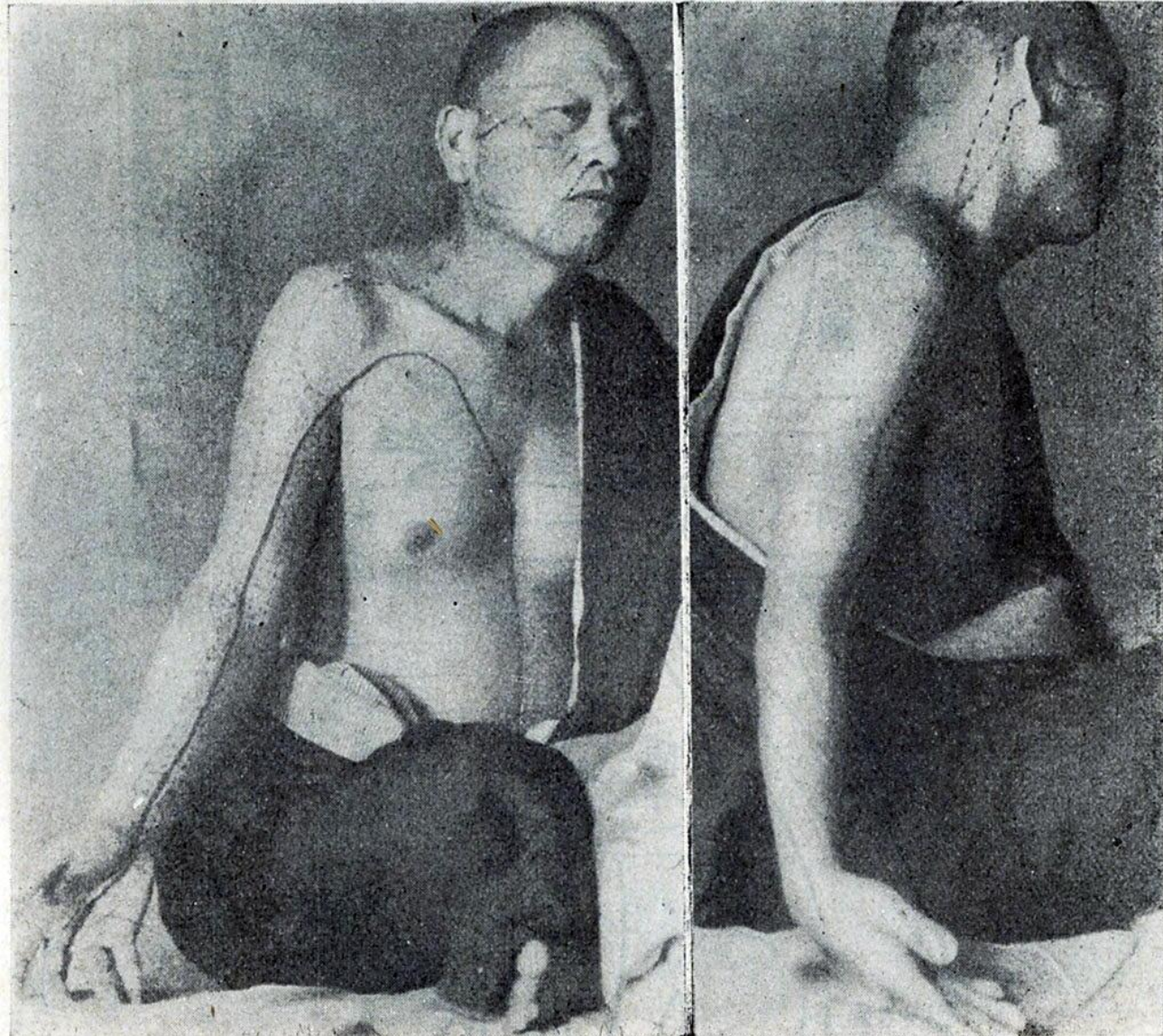
7.足・太陽經



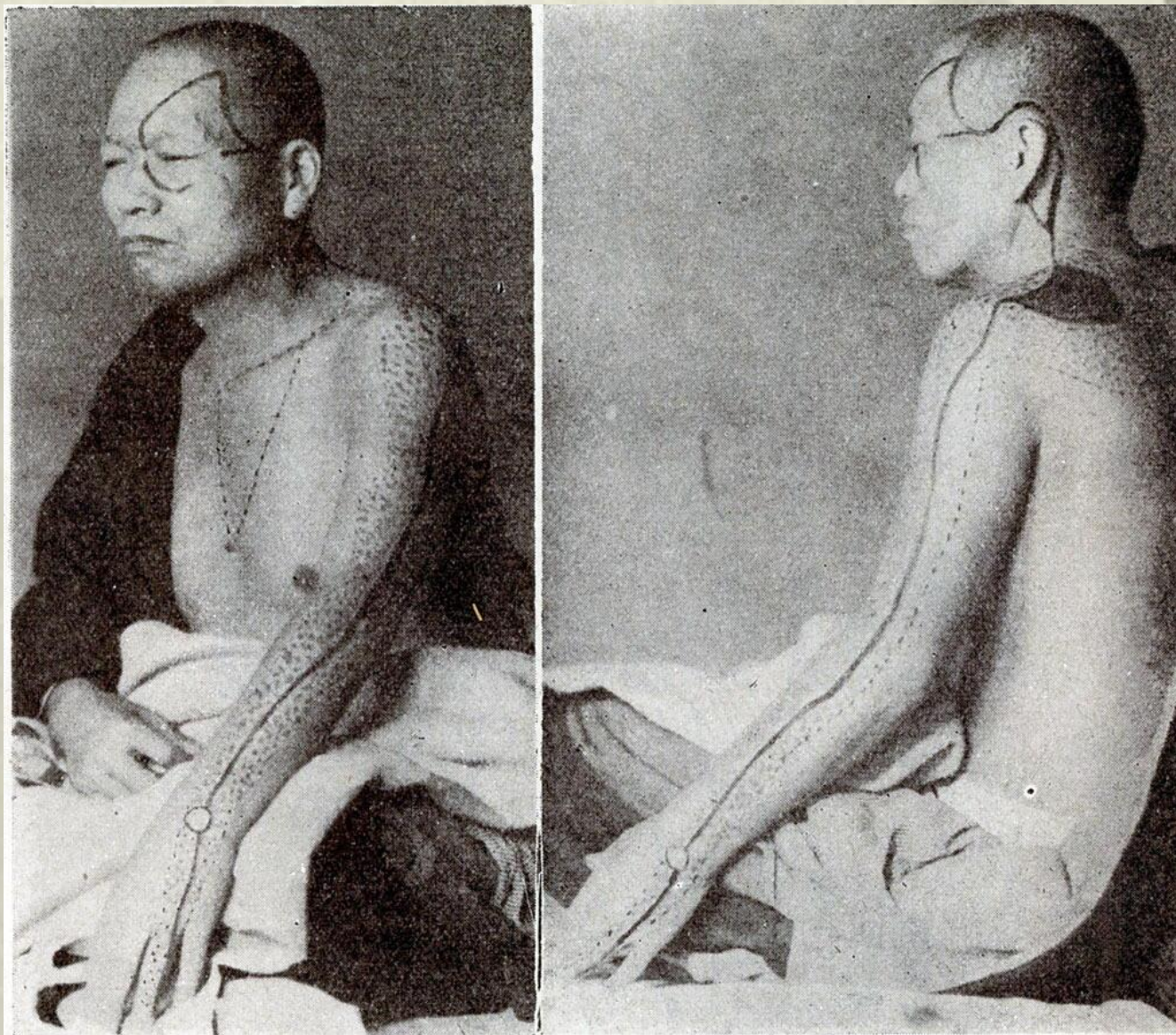
8. 足・少陰経とその支



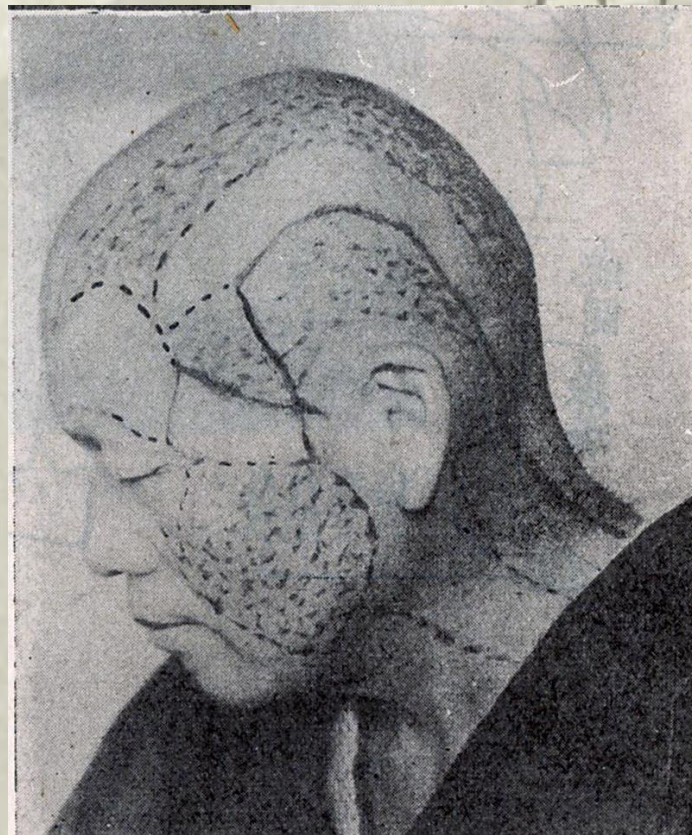
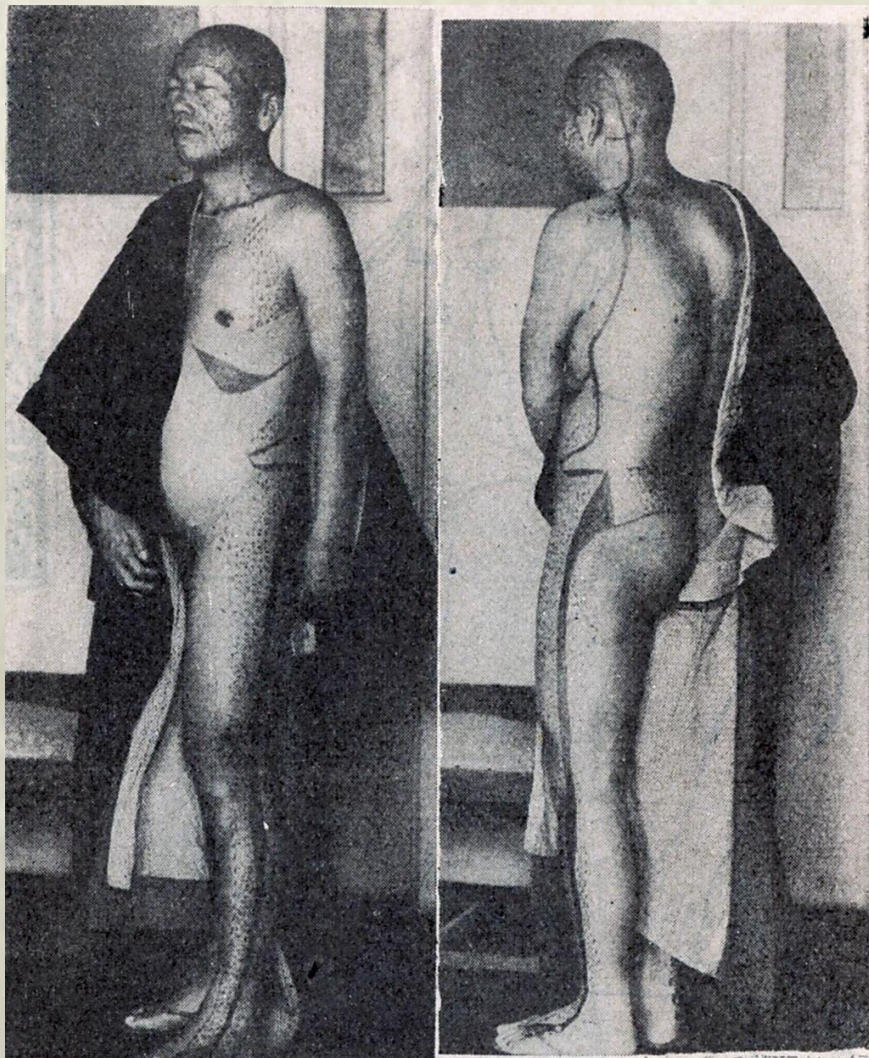
9.手・厥陰経とその支



10. 手・少陽経とその支



11. 足・少陽経とその支



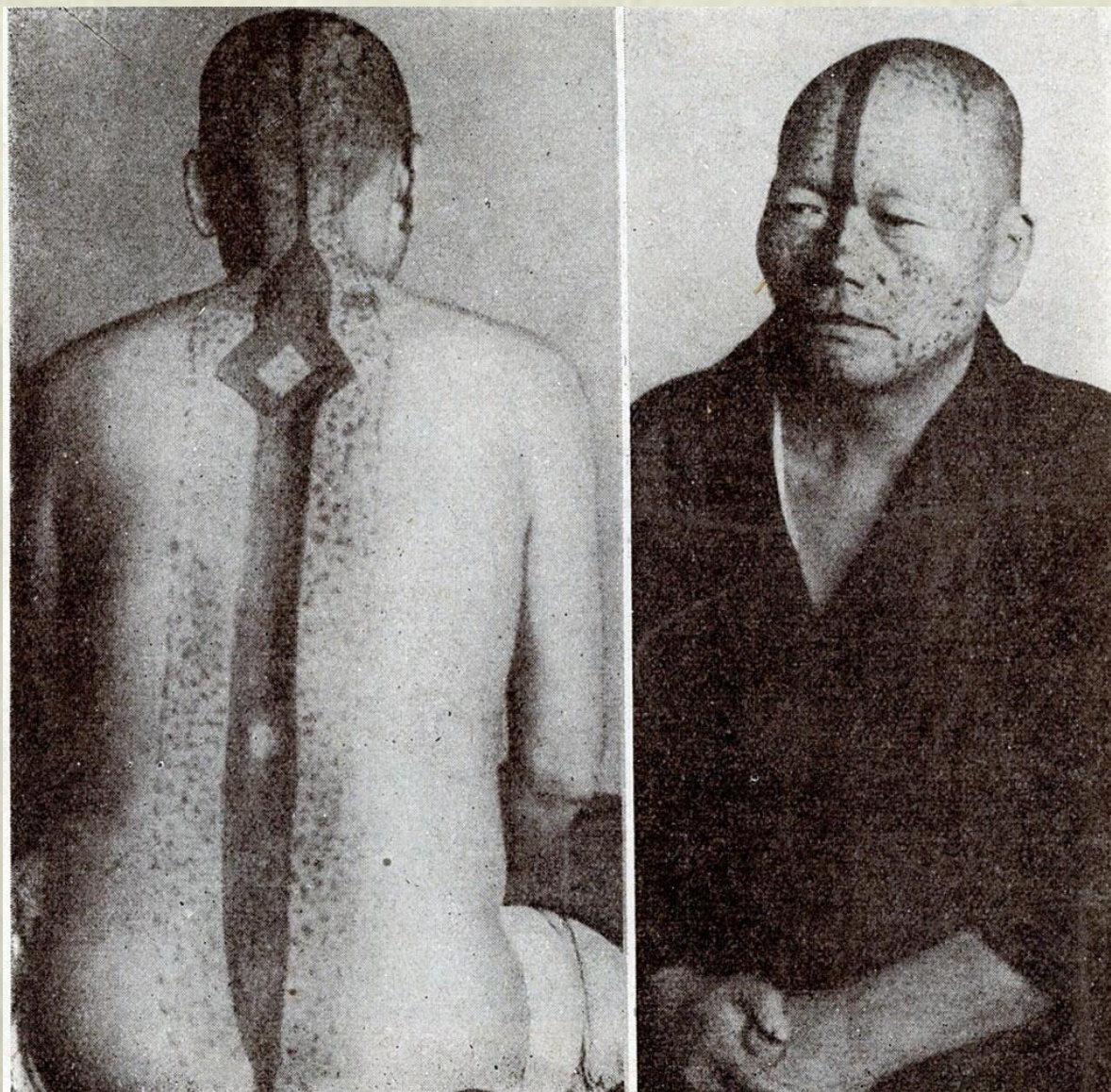
12. 足厥陰経とその支



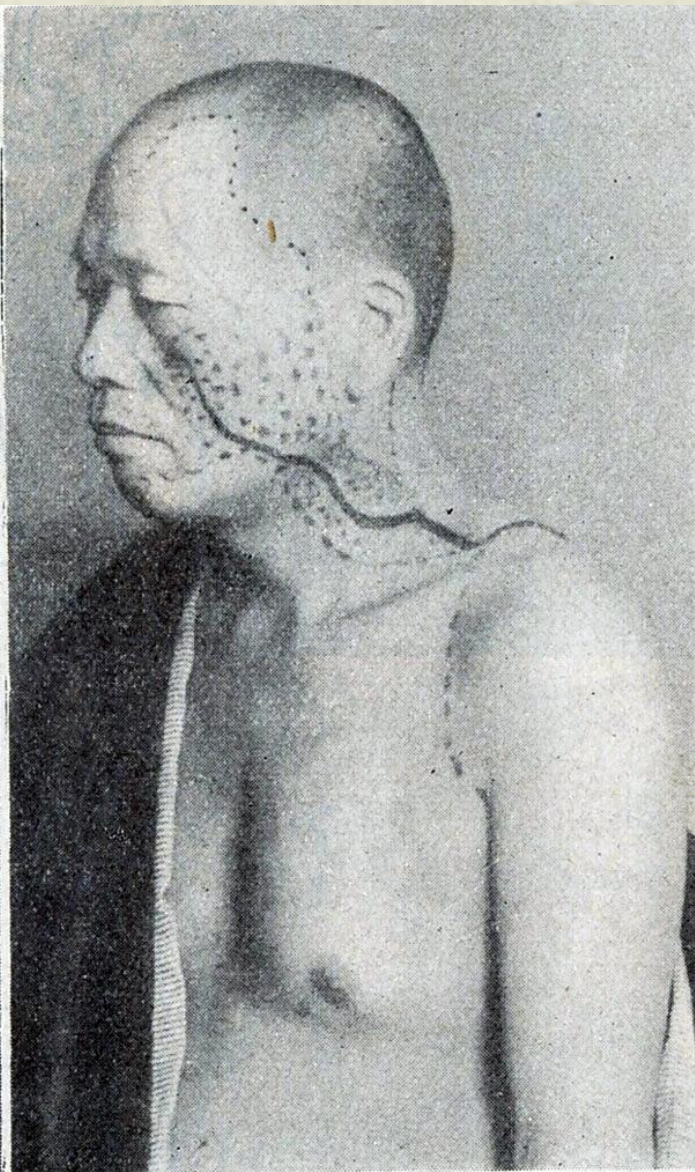
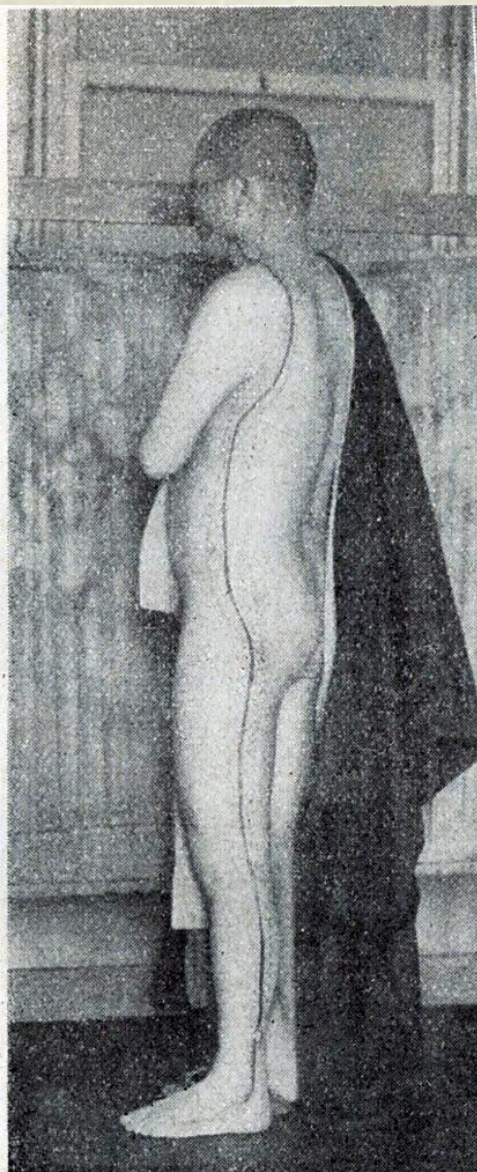
13. 任脈



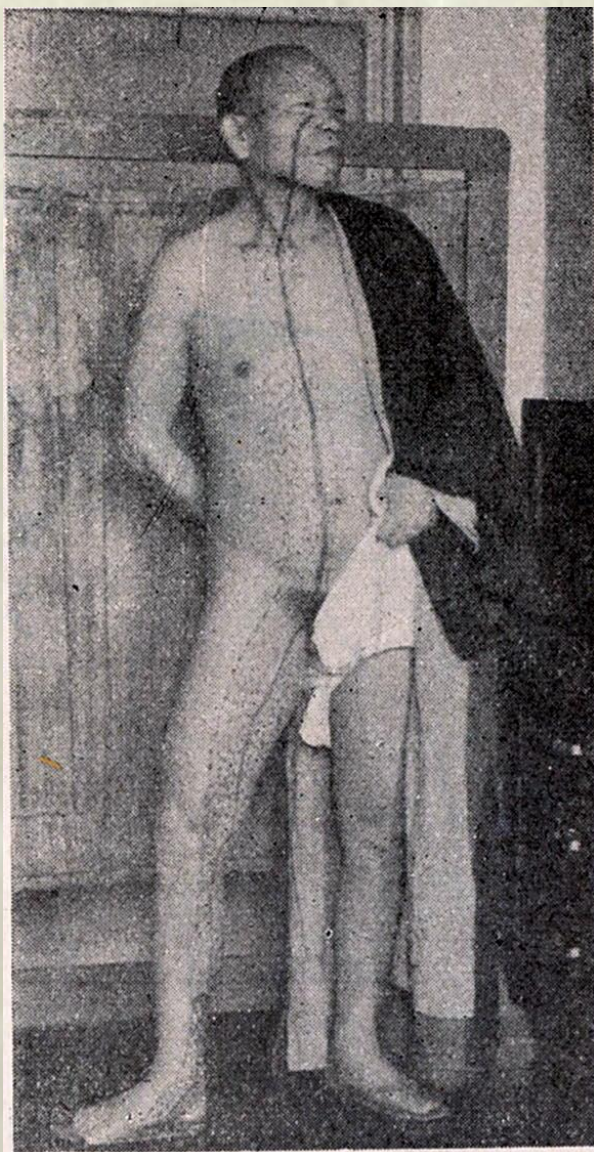
14. 督脈



15. 陽蹻脈



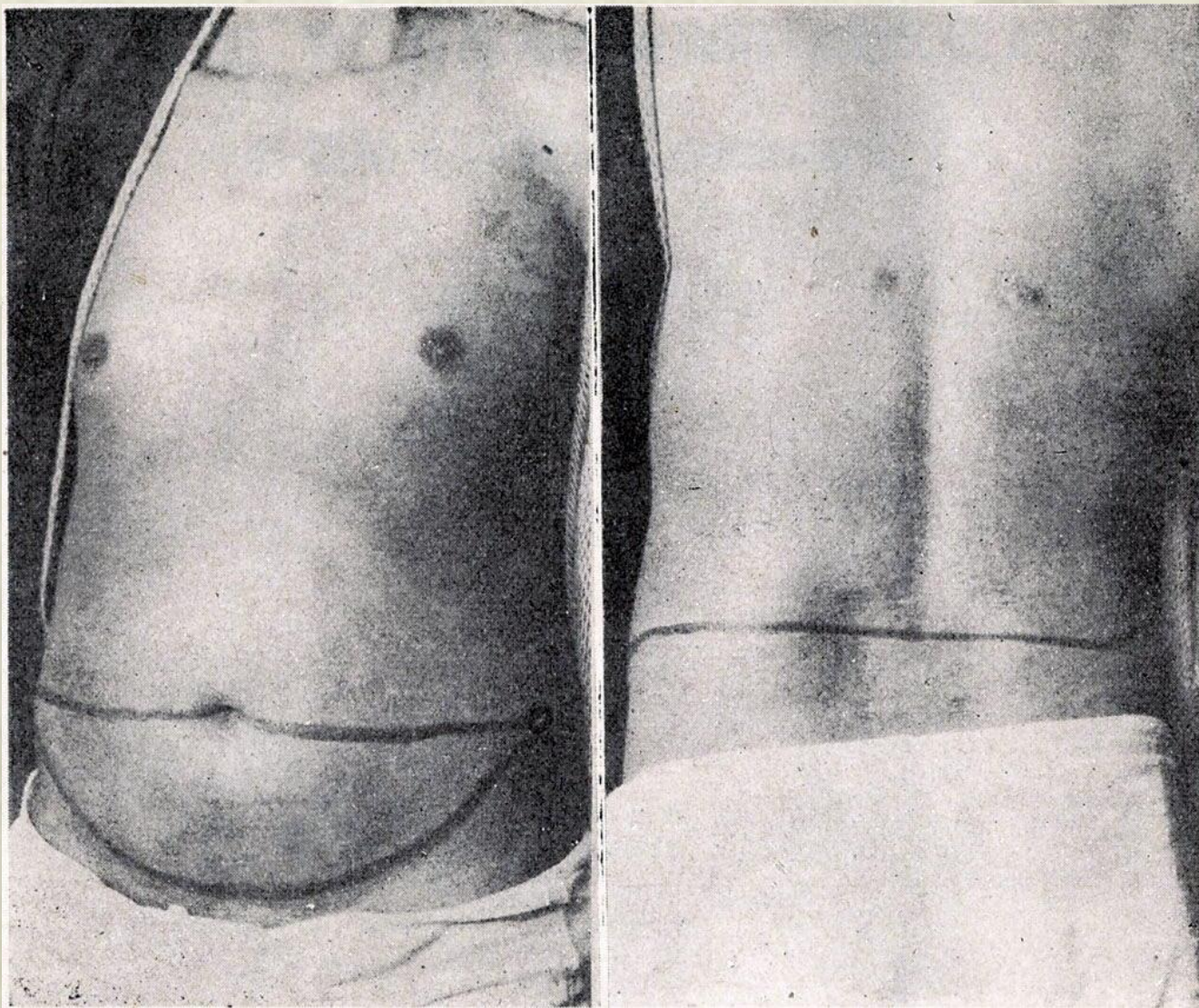
16. 陰維脈



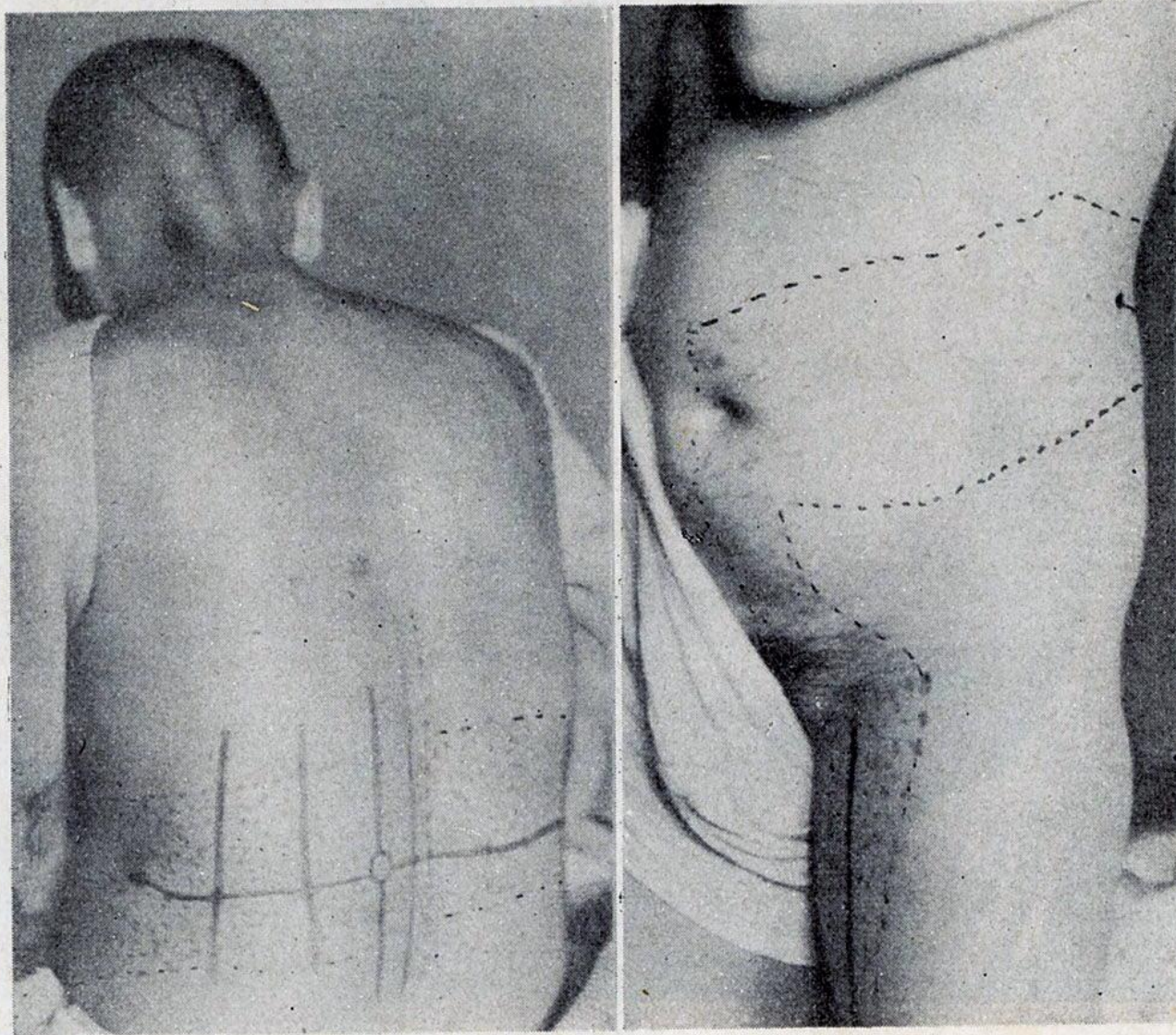
17. 陽維脈



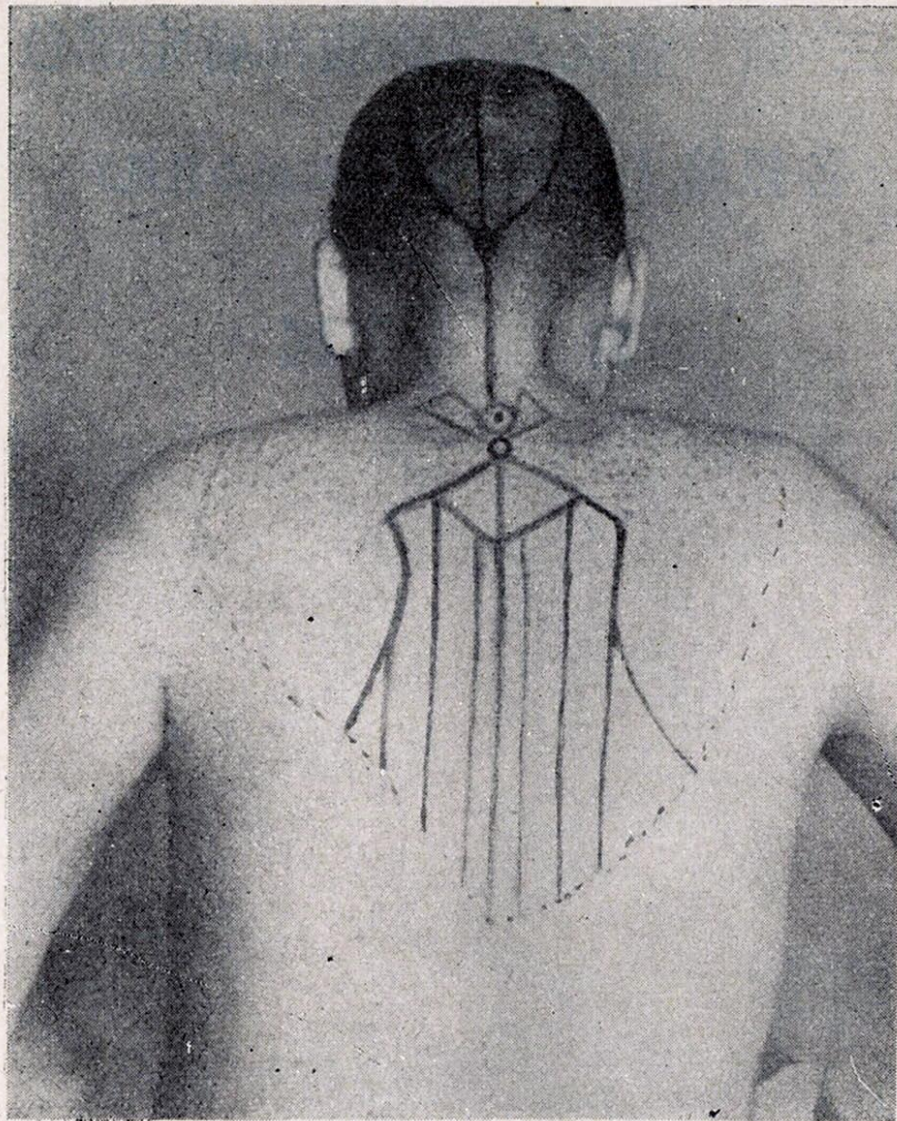
18. 衝脉・帶脈



19. 腎俞



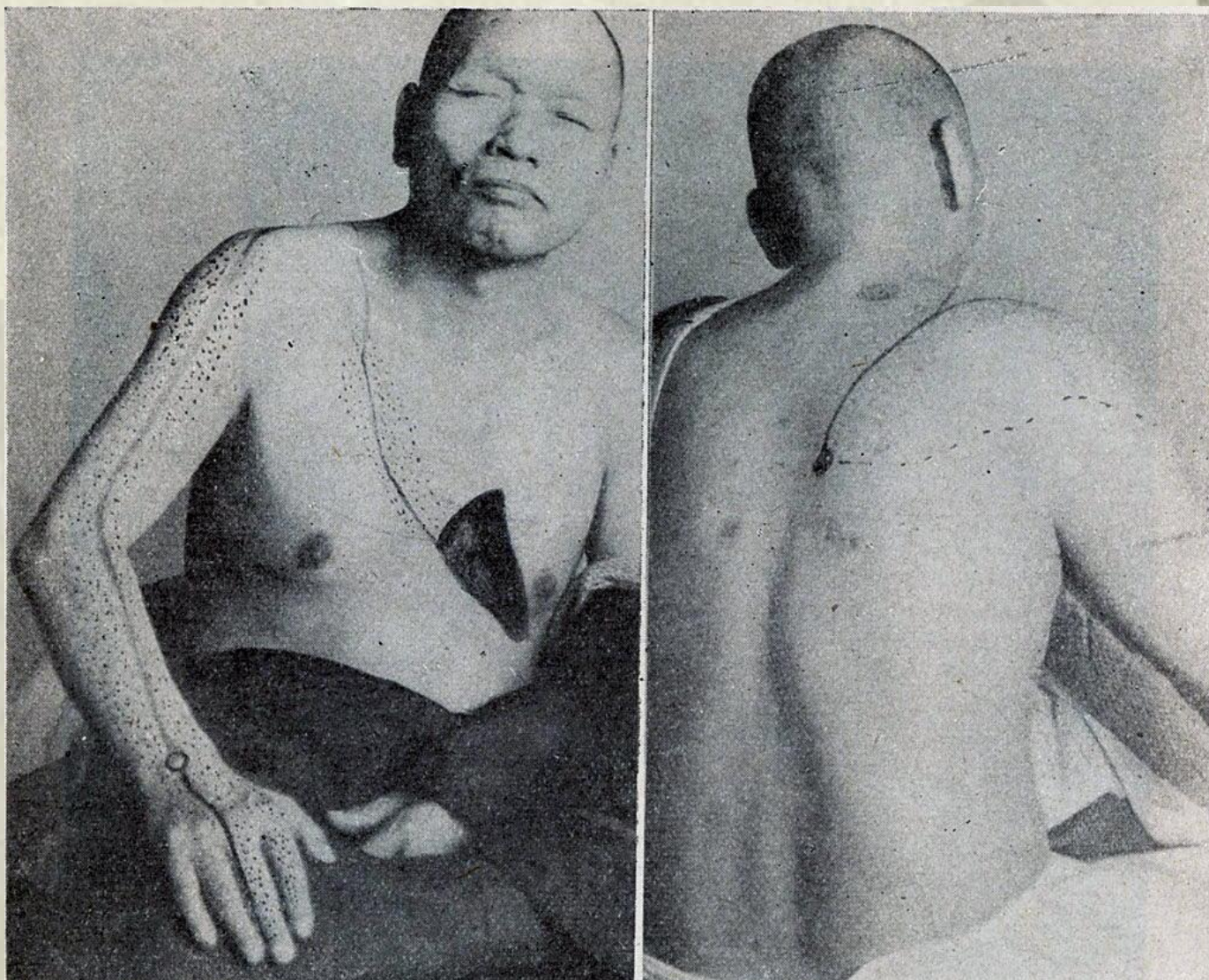
20.大椎



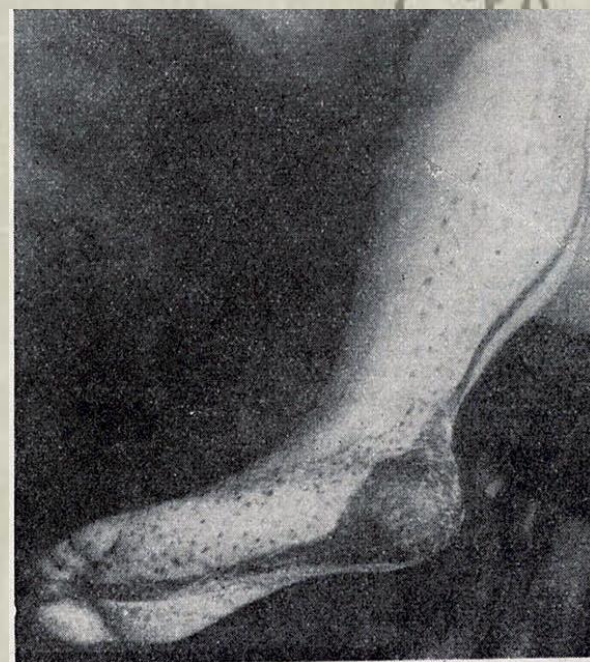
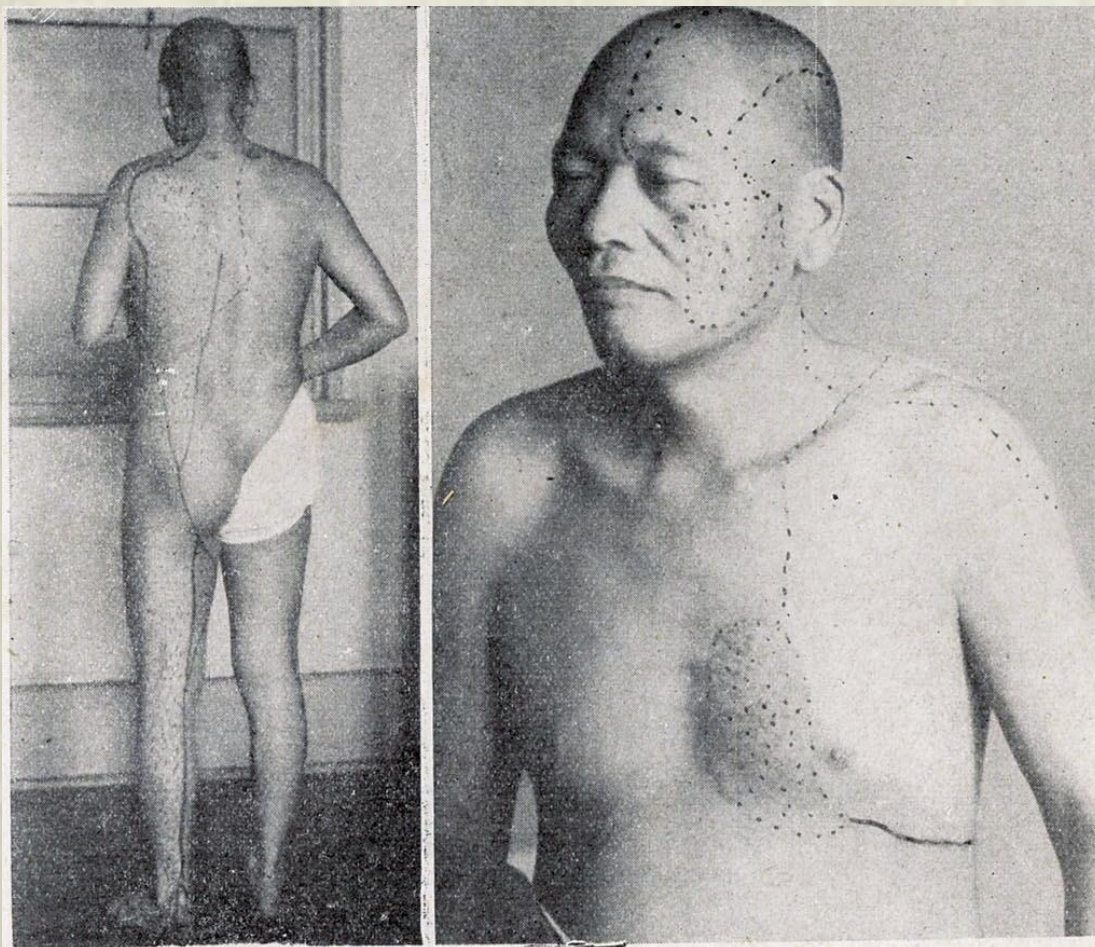
V. 新経絡の鍼響現象

千葉医大の実験において、膈兪と八兪（仮称。無名穴）刺鍼時にいずれの経絡にも属さない感覚圏が生じたため、改めて刺鍼点を設けて再実験。

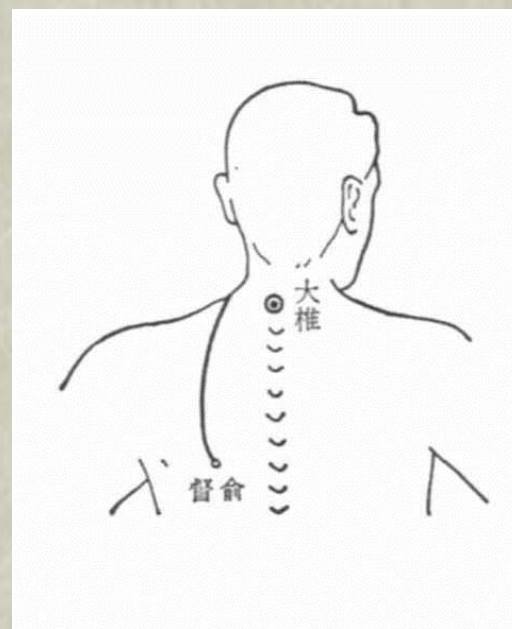
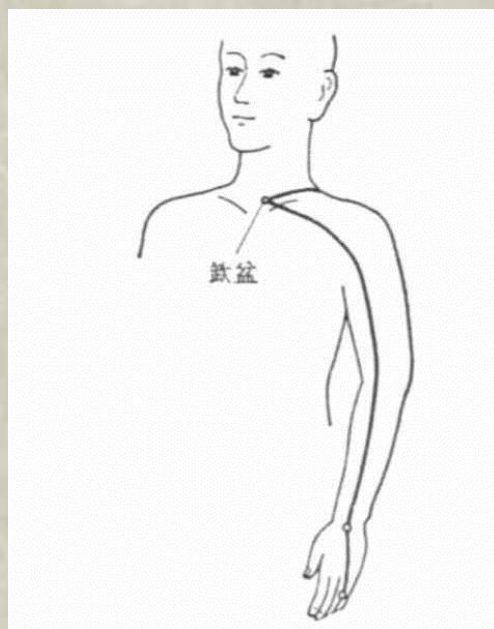
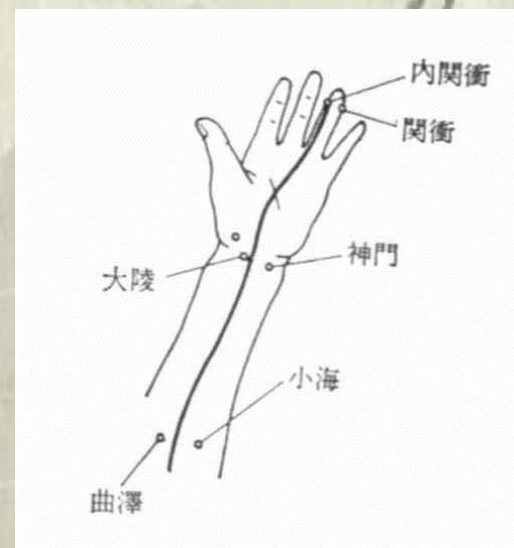
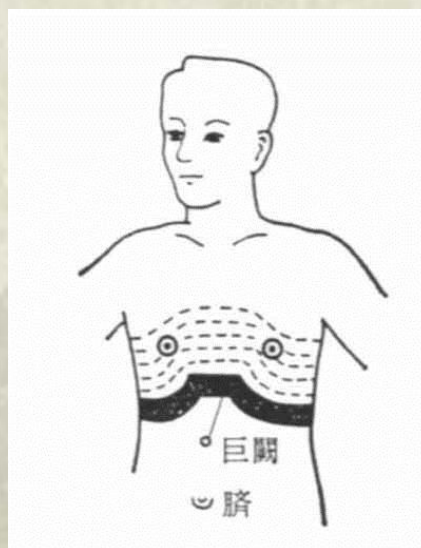
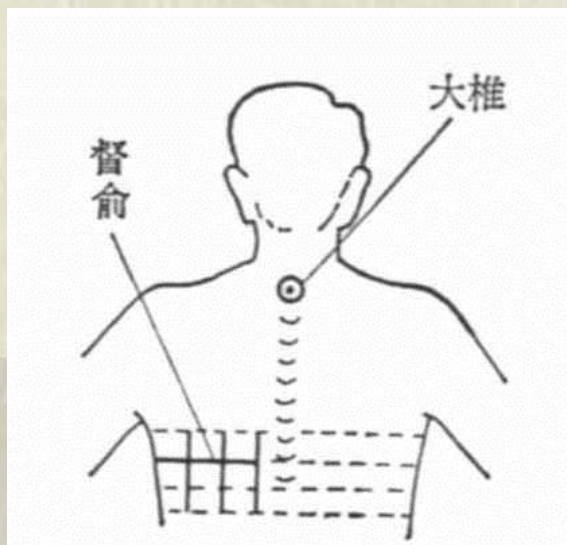
1. 膈俞經



2. 八愈経



3. 督俞經

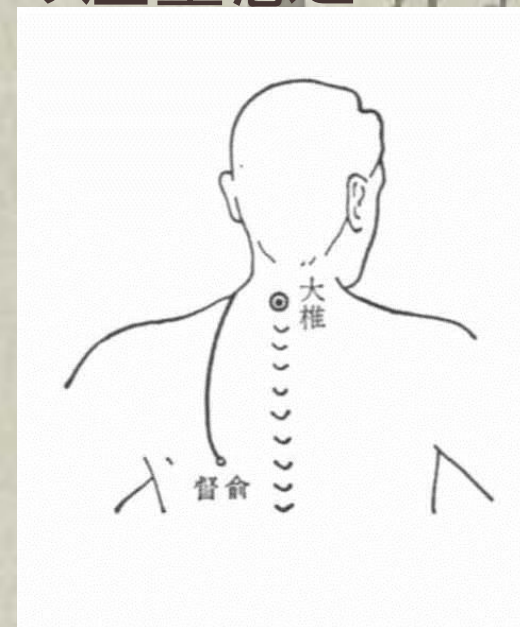
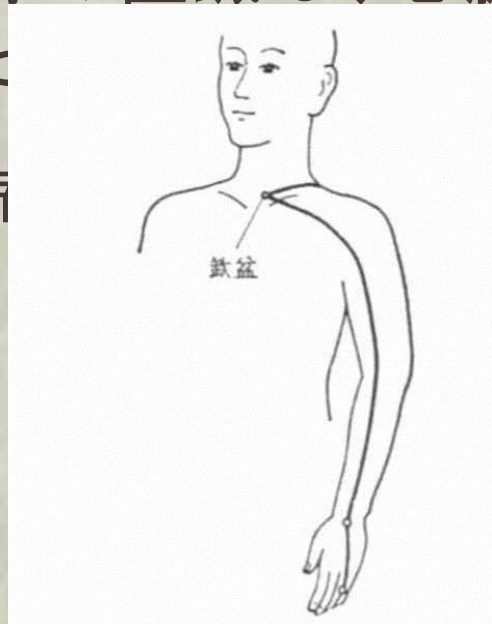
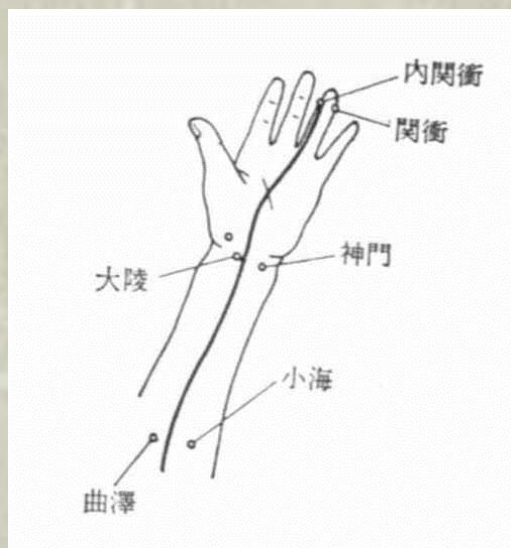


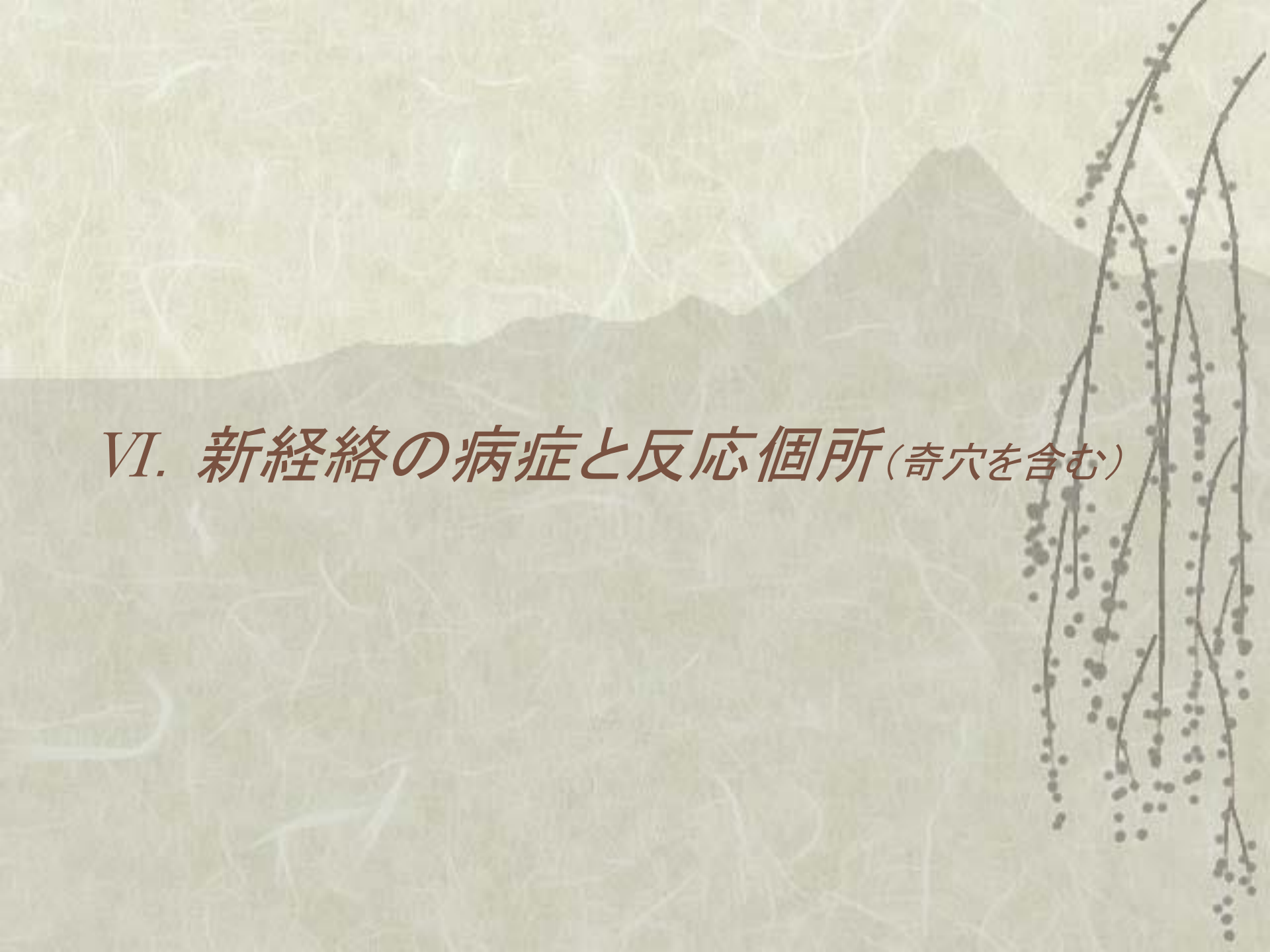
3. 督兪経

①右督兪の置鍼(刺入深度1cm)により前記の千葉の実験と同様な鍼響感覚を訴える。さらに刺入部から肩井付近に上り、右第4指内端に達する感覚を訴えるも感覚は鈍く断続的

②左督兪の右と同様の置鍼は、心臓の圧重感と

たた
側端

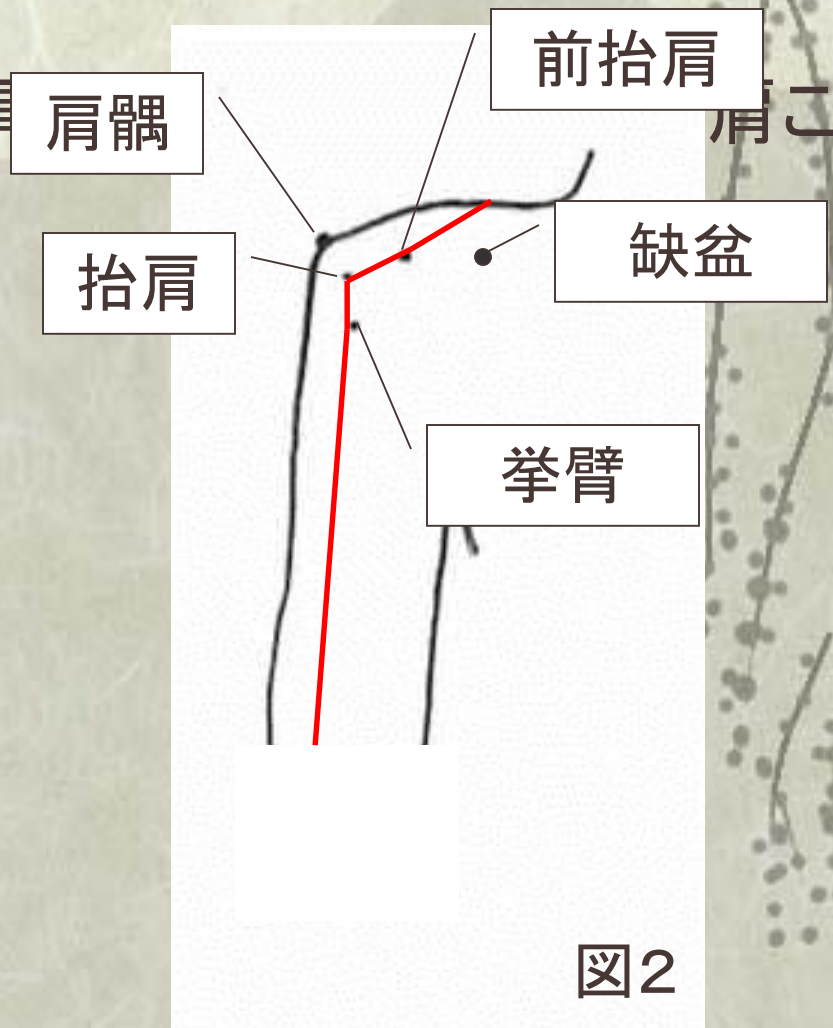
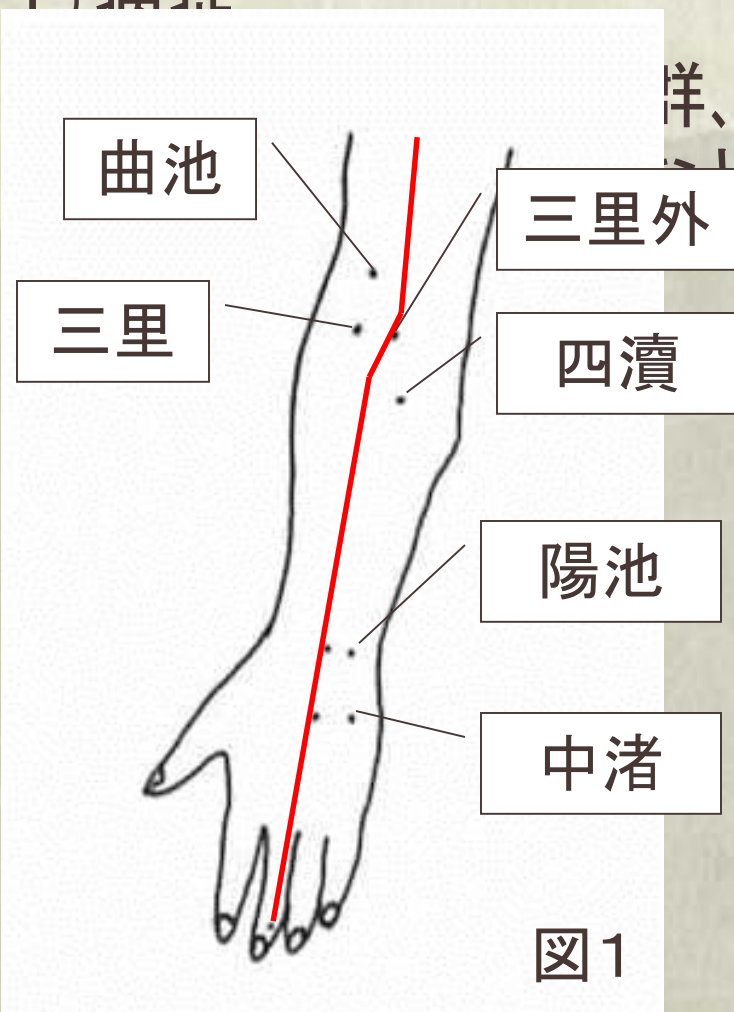


The background features a traditional Japanese ink wash style illustration. In the upper half, there are soft, layered mountain peaks in shades of light green and grey. On the right side, a willow tree with dark, slender branches and small, dark buds hangs down. The overall texture is reminiscent of aged paper with visible fibers.

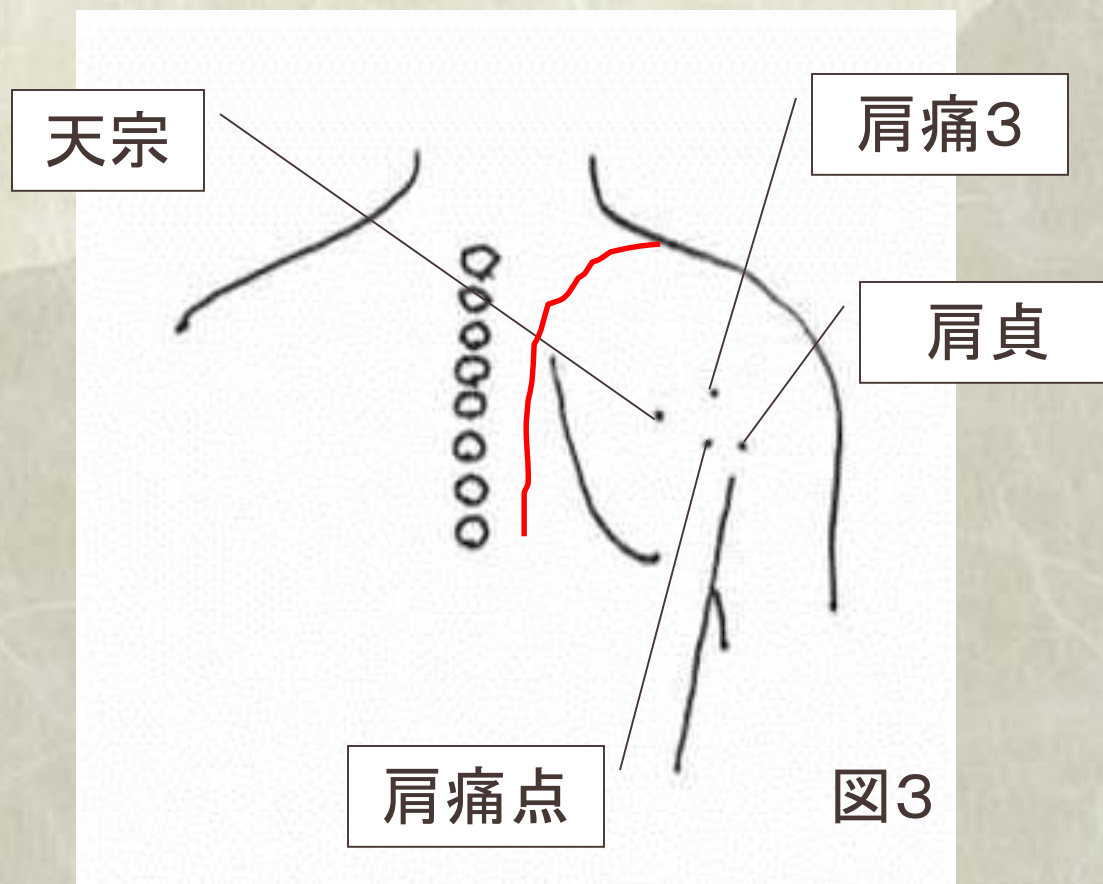
VI. 新経絡の病症と反応個所(奇穴を含む)

1. 膈俞經

1) 病症.

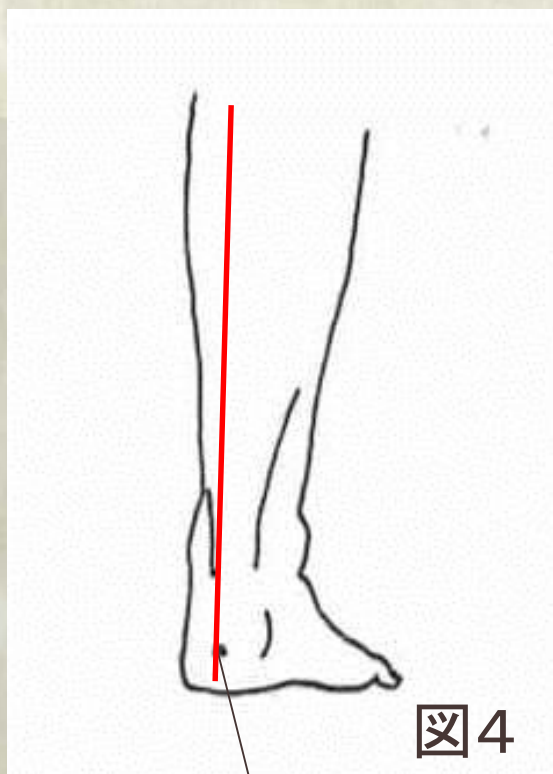


1. 膈俞經

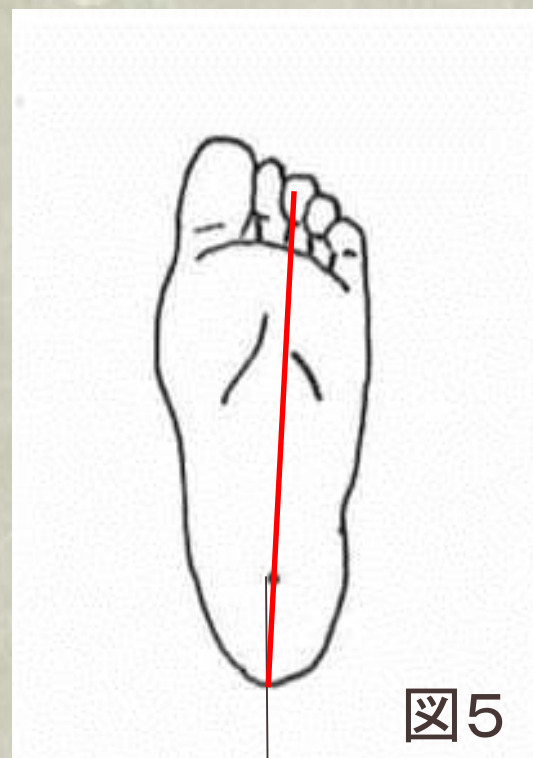


2. 八紘経

1) 病症： 踵の冷え、不眠症など



女膝



失眠

3. 督俞経

1) 病症： 弾発指、胸膈不進、胸部圧重感、
肩こり、上腹部膨満感、頸肩腕症候群、
肩甲骨内炎痛など

